非核平和都市品川宣言

2025　品川区平和使節

派遣レポート

Shinagawa City
品川区

※英文訳は巻末の発行者欄

非核平和都市品川宣言

今、この地球に、
人類は自らを滅ぼして余りある核兵器を蓄えた。
いまだかつて、開発された兵器で使われなかったものはない。
これは、歴史の恐るべき証明である。

一刻も早く、核兵器をなくさなければならない。
頭上に核の閃光がひらめく前に。
遅すぎたとき、それを悔やむだけの未来すら、
我われには残されていない。

品川区は、核兵器廃絶と恒久平和確立の悲願を込めて、
ここに非核平和都市を宣言し、全世界に訴える。
我われは、いかなる国であれ、いかなる理由であれ、
核兵器の製造、配備、持込みを認めない。
持てる国は、即時に核兵器を捨てよと。

このかけがえのない美しい地球と、
そこに住む生きとし生けるものを、守り伝えるために。

昭和 60 年 3 月 26 日
品川区

非核平和都市品川宣言
シンボルマーク

平和の象徴であるハトが爆弾をくわえていってしまうことを表しており、ハトには「品川」の文字をデザインしています。

はじめに

品川区では、核兵器の廃絶と恒久平和の確立を願い、昭和 60 年 3 月 26 日に、区民の総意のもとに「非核平和都市品川宣言」を行いました。

この宣言の趣旨を一人でも多くの方々に理解していただき、戦争の悲惨さや平和の大切さについて一緒に考えていくため、品川区では様々な事業に取り組んでまいりました。

本紙における、広島・長崎への平和使節派遣事業は、宣言の趣旨を次世代に語り継いでいくことを目的として、昭和 62 年から実施していた「青少年広島の旅」を引き継ぎ、平成 15 年度から始めたものです。「品川区平和使節」として位置づけ、本年で 23 回目を迎えました。

広島平和使節派遣には品川区立中学校 8 年生 15 名、長崎平和使節派遣には一般公募の青少年 6 名が参加しました。また平和に関するパネル展示に「折り鶴コーナー」を設け、たくさんの方のご協力をいただき千羽鶴を作成しました。平和使節派遣生は区民の代表としてそれぞれの鶴にこめられた「平和」への願いを胸に、千羽鶴を広島・長崎へ捧げました。

広島の派遣生はそれぞれの学校の文化祭や報告会などにおいて、派遣生一人ひとりが知恵を絞り、友達や保護者、地域の方々に一生懸命平和への想いを伝えました。

この「派遣レポート」には、現地に行った派遣生が感じ、学んだ貴重な経験が報告されています。今回の経験を通して、平和の尊さ、大切さに対する認識を深め、その「想い」が学校や職場、地域社会に広がり、あらためて平和について考えるきっかけになれば幸いです。

末筆ではありますが、本事業の実施にあたりご協力いただきました桒本 勝子様、小早川 真裕望様、寺本 真理子様、中川 俊昭様、広島市、広島県原爆被害者団体協議会、長崎ピースボランティアの皆様、岩本 孝雄様、長崎市、公益財団法人長崎平和推進協会、澤原 義明様、平和への願いを込めて千羽鶴を折っていただいた皆様ほか、関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

令和 8 年 3 月

品川区

目　次

はじめに ･･･ 1

第１部　中学生広島平和使節派遣
　1．行動日程表 ･･･ 3
　2．広島での主な活動 ･･････････････････････････････････ 5
　3．感想文 ･･･ 9
　4．被爆者講話 ･･････････････････････････････････････ 22
　5．成果報告 ･･ 36

第２部　青少年長崎平和使節派遣
　1．行動日程表 ･････････････････････････････････････ 45
　2．長崎での主な活動
　（1）被爆体験講話 ･･････････････････････････････････ 47
　（2）被爆建造物等のフィールドワーク ･･･････････････ 48
　（3）平和祈念式典 ･･････････････････････････････････ 49
　（4）平和学習（意見交換会） ･････････････････････････ 50
　（5）長崎原爆資料館・原爆死没者追悼平和祈念館　見学 ･･････ 51
　（6）碑めぐり ･･･････････････････････････････････････ 52
　3．感想文 ･･･ 53
　4．派遣をふり返って ･････････････････････････････････ 58

第３部　資料編
　1．広島
　（1）広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式次第 ････････････ 61
　（2）平和宣言 ･･･････････････････････････････････････ 63
　（3）平和への誓い ･･･････････････････････････････････ 65
　2．長崎
　（1）長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典次第 ･･････････････････ 66
　（2）長崎平和宣言 ･････････････････････････････････････ 67
　（3）平和への誓い ･･･････････････････････････････････ 69

第１部
中学生広島平和使節派遣

●派遣生

（A グループ）

東海中学校　：齋藤　捺希
荏原第一中学校：小林　環希
戸越台中学校　：森岡　稔理
伊藤学園　：富樫　蓮月
豊葉の杜学園　：岡住　ひなた

（B グループ）

大崎中学校　：山本　裕斗
浜川中学校　：廣田　ゆら
荏原第五中学校：清水　陽太
日野学園　：秋山　優香
荏原平塚学園　：佐原　菜那子

（C グループ）

鈴ヶ森中学校　：千葉　柑奈
冨士見台中学校：吉野　輔
荏原第六中学校：長谷川　ゆから
八潮学園　：實川　希衣
品川学園　：仲川　結

●引率者

荏原第六中学校副校長：朝日　亮介
戸越台中学校教諭　：高崎　恵子
豊葉の杜学園教諭　：髙橋　航太
区長室総務課　：中村　誠

（敬称略）

1．行動日程表

令和７年度 中学生広島平和使節派遣　令和7年8月5日～7日（2泊3日）

8月5日（火）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
8：45	集合・出発式	JR品川駅
9：19～13：02	新幹線乗車（品川駅～広島駅）	
14：00～15：30	被爆者講話	ANAクラウンプラザホテル広島
16：00～17：30	原爆ドーム・平和記念公園等 見学	平和記念公園等
18：30～19：30	夕食	リバーズガーデン
20：00	ホテル着・一日のまとめ	ANAクラウンプラザホテル広島
22：00	就寝	

8月6日（水）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
5：55	集合・朝食	ANAクラウンプラザホテル広島
8：00～9：00	平和記念式典参列	平和記念公園
9：30～11：30	平和学習（これまでの振り返り、灯ろう作成）	ANAクラウンプラザホテル広島
12：00～12：50	昼食	お好み村
13：00～13：40	袋町小学校平和資料館見学	袋町小学校平和資料館
14：00～17：00	平和記念資料館・国立広島原爆死没者追悼平和祈念館見学	広島平和記念資料館、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
18：30～19：30	夕食	リバーズガーデン
19：50～20：15	灯ろう流し見学	元安川
20：30	ホテル着・一日のまとめ	ANAクラウンプラザホテル広島
22：00	就寝	

8月7日（木）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
7：00	集合・朝食	ANAクラウンプラザホテル広島
9：00～11：00	碑めぐり講話	平和記念公園
12：00～12：50	お土産購入	広島駅
13：18～17：08	新幹線乗車（広島駅～品川駅）	
17：15	解散式・解散	JR品川駅

◎事前学習会・事後報告会（広島・長崎派遣合同で実施）

第１回事前学習会　６月 30 日（月）

派遣生が派遣の目的を理解し、より高い意識を持って、派遣に臨めるよう学習しました。

（1）派遣生自己紹介
（2）非核平和都市品川宣言事業について
（3）平和使節派遣事業について
（4）事前学習
（5）派遣日程や生活面・健康管理について
（6）次回までの課題について

第２回事前学習会　８月１日（金）

区長・教育長を表敬訪問し、派遣に向けての決意表明をしました。また、各グループが１回目の事前学習会で決めたテーマについてグループで発表・意見交換を行い、各グループでまとめ、全体へ発表しました。

（1）区長・教育長 表敬
（2）グループ学習
　各グループで、関心のある学習テーマを決め、それぞれが自己学習を行い、グループごとに共有
（3）「派遣のしおり」内容確認
（4）派遣の諸注意事項について

事後報告会　８月 29 日（金）

各グループで派遣中にに感じたこと、学んだことを区長・教育長、学校関係者、保護者に向けて発表しました。

（1）被爆2世による講話
（2）発表準備
（3）派遣の成果発表

2. 広島での主な活動

(1) 被爆者講話

〈日　時〉 8月5日（火）14：00～15：30
〈場　所〉 ANA クラウンプラザホテル広島内会議室
〈内　容〉 被爆体験者である桒本 勝子さんによる被爆体験講話を行いました。

● 22ページから講話の全文を掲載しております。

被爆者講話の様子

講師に質問する派遣生

(2) 平和記念公園・原爆ドーム見学

〈日　時〉 8月5日（火）16：00～17：30
〈場　所〉 平和記念公園
〈内　容〉 平和記念公園と原爆ドームを見学し、千羽鶴を捧げました。

(3) 平和記念式典参列

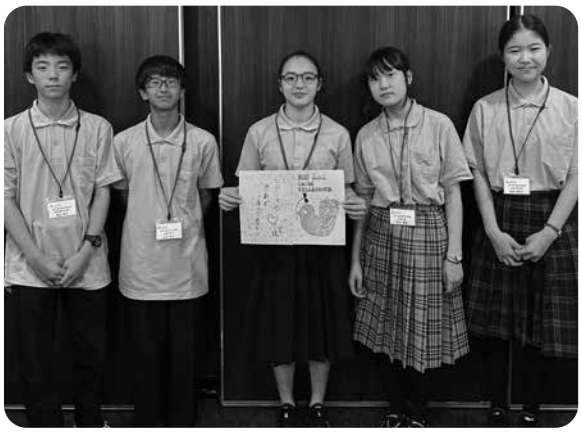
〈日　時〉 8月6日（水）8：00～9：00
〈場　所〉 平和記念公園
〈内　容〉 被爆80周年広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式に参列し、原爆が投下された8時15分には、一斉に黙とうを捧げました。

● 61ページから式典のプログラム（抜粋）を掲載しております。

(4) 平和学習（振り返り学習、灯ろうづくり等）

〈日　時〉 8月6日（水）9：30～11：30
〈場　所〉 ANAクラウンプラザホテル広島内会議室
〈内　容〉 これまでの振り返り学習および平和への想いを書いた灯ろうを作成しました。

グループで振り返り学習



それぞれの想いを書いた灯ろう

(5) 平和記念資料館、原爆死没者追悼祈念館見学

〈日　時〉 8月6日（水）14：00～17：00
〈場　所〉 平和記念資料館・原爆死没者追悼祈念館
〈内　容〉 資料館、祈念館に展示された被爆の実相を自分の目で見ることによって、当時の惨状を感じ取り、平和への思いを強くしました。

(6) 灯ろう流し見学

〈日　時〉 8月6日（水）19：50～20：15
〈場　所〉 平和記念公園・元安川
〈内　容〉 戦争で亡くなられた多くの方の御霊を慰めるとともに、平和への祈りを込めて派遣生全員で灯ろうを作成し、元安川に流しました。

平和への願いが込められた灯ろうが元安川を流れる

（7）碑めぐり講話

〈日　時〉 8月7日（木）9：00～11：00
〈場　所〉 平和記念公園
〈内　容〉 3つのグループに分かれ、講師の方によるガイドを受けながら平和記念公園内に設置されているさまざまな石碑や遺構などを見学しました。

寺本 真理子（てらもと まりこ）さん

中川 俊昭（なかがわ としあき）さん

小早川 真裕望（こばやかわ まゆみ）さん

3. 感想文

「知る」から「動く」へ

東海中学校　齋藤　捺希

毎日のように他の国々で起こる様々な紛争や戦争のニュースに、私は心がしめつけられるような思いになっていました。戦争で困っている人に自分は何ができるのか、また平和のために貢献できることは何かを探したい。また現地に行って平和や戦争について学ぶことで、自分にとって新たな視点、視野を広げたい。そのような理由から広島平和使節派遣に参加しました。

実際に被爆地を訪れることで、教科書や映像では得られない深い学びを得ることができました。原爆ドームを目の前にした瞬間、言葉では表せない重みを感じました。丈夫なはずの建物が崩れていたり、地面に建物の残骸がたくさんあったり、過去の悲劇を表していて、胸が苦しくなりました。

被爆者講話から、時が経っていくにつれて募っていく悲しみ、不安こそが戦争、被爆の一番の被害なのではないかと思いました。「小さい時の記憶にはお腹が空いていたことしかない」というお話に、普段自分が何気なく口にしていることが軽率だったと気付かされました。

また、これから先、「被爆者がいなくなっていく中でできることは語り継いでいくことだ」と教わりました。平和のためには、まずは悲惨なことが起きた過去を知り、これらのことを二度と起こさないためにもそれについて考えていくことが平和への一歩だとこの時点で思っていました。

式典では、多くの方が話をしてくださりました。その中で、最も心に響いたのは、現状世界で平和を叶えるために行われていることは矛盾だらけということです。一人ひとりにとっての平和には差があるから、ということでした。この言葉で、語り継げば平和に繋がるという視野の狭い考え、自己満足であることに気付かされました。だからこそ、私はもっと世間について自分の考えを深めていくことの必要性を感じました。

そのためには、まず毎日何気なく見ているニュースの出来事がどのようにしておきたことなのか、など因果関係を明確にしながら見ていきたいです。そして、広い視野では自ら同級生、学校の人、家族に広島でのことを話し、それに対する意見をもらっていきたいです。まだまだ平和について浅はかな考えで伝えていくという曖昧な目標しかありません。その中で、平和実現のために何をするかではなく、今自分ができることの最善を尽くそうという考えに至りました。

まだ派遣で学んだことは完全に自分の新たな視野として取り入れることはできていません。だから、これから先さらに多くの人へ伝えていく中で、なぜそのように思うのかも考え聞けるようにしていきたいです。広島派遣を通し、自分の平和への考えの浅さ、視野の狭さを改めて考え直すことができる機会となりました。

これからも、平和や戦争に関する活動に積極的に取り組み、自分が社会や平和に貢献できることを探し続け行動にしていきたいです。

するべきこと

荏原第一中学校　小林　環希

平和を創るために、私がするべきこととは何だろうか。私は広島に行くまで、この問いに答えられなかった。戦争や原爆についても、たく

さんの人が苦しんで亡くなったんだという漠然としたイメージしかなかった。だが、広島に行って、当時の人々の思いや生活、そして何よりも原爆に対する形容し難い気持ちを学んだ。

派遣１日目、私たちは被爆者である桒本勝子さんの講話を聴いた。桒本さんは、自分が体験した戦争と原爆の痛ましい記憶を話してくださった。疎開先での、食べるものが無く、親戚にも除け者扱いされていたつらい生活。市内を埋め尽くす、皮膚が焼けただれた数々の遺体。被爆して放射線による病に侵されていく母親。桒本さんの言葉からは、当時のつらさや悲しさ、苦しさがひしひしと伝わってきた。実際に戦争を体験した方の言葉は、聴く人に心に抱えた悲しみや痛みといった感情まで思わせる力を持っていた。私は桒本さんの講話を聴いて、もうこれ以上、戦争で傷つく人を生み出してはいけないと改めて実感した。大切なものを失って悲しむ人や、戦争と核兵器に苦しみ怯える人。このような人を少しでも減らすため、今回の貴重な体験をいかし、桒本さんが言っていた「話し合いで物事を決められる世の中」の大切さを伝えていきたいと思った。

派遣２日目の８月６日、私たちは平和記念式典に参列した。式典では、広島市の小学６年生２人が、こども代表として平和への誓いを述べていた。誓いの中で、「たとえ一つの声でも、思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができる」という言葉があった。私はこの言葉を聴くまで、広島で平和について学んでも、自分のような中学生には何も変えられないのではないか、と不安に思っていた。しかし、こども代表の言葉を聴いて、自分の言葉や行動で周囲を変えることができるかもしれない、と考えが改まった。小さな声を積み重ね、周囲を巻き込んで大きな声となっていく。この流れが、平和を創り上げていくのではないかと考えた。「一つの声でも変えることができる」この言葉を胸に、私もこれから行動を起こしていきたいと感じた。

平和を創り上げるためには、まず周囲の人に広島での学びを知ってもらうことが必要だ。だが、知ってもらうだけでは世界を変えることはできない。私は、一人一人が平和について自主的に考えることで、平和を創り上げるきっかけになると考える。私が今するべきことは、広島での学びをただ伝えるだけではなく、一緒に平和を考えることだ。これからは、一人一人が平和について考えるきっかけとなれるよう、自分にできる活動を積極的に行っていきたい。

託された使命

戸越台中学校　森岡　稔理

私の曽祖母は、沖縄戦を生き抜き、戦争で大変な苦労をしたそうです。しかし、曽祖母は戦争の話をしたがらなかったため、私は沖縄戦を知ることがないまま、おととし、曽祖母は亡くなってしまいました。戦後 80 年が経ち、戦争体験者が次々に寿命を迎える中、被爆者からの話を聴こう、と広島平和使節派遣に参加を決意しました。

広島平和使節派遣の初日は、到着してすぐ被爆者講話や、平和記念公園の散策など、たくさんの体験をしました。被爆者講話では、６歳の時に被爆された桒本勝子さんに話を伺いました。桒本さんは、自身の体験を一つ一つ丁寧に

話してくださいました。戦時中のひもじい思いや、原爆投下後の広島の絶望感など、当時の様子が生々しく感じられて、実際に話を聴くことでしか得ることのできない当時の細かな感情を知ることができました。

翌日は平和記念式典に参加し、袋町小学校平和資料館や平和記念資料館、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を訪れました。多くの方の遺品が展示されており、それらはどれも原形がわからないほど焼けていました。その中でも私は、三人の中学生の遺品にとても心が打たれました。8月6日の朝、「行ってきます。」といつものように家を出て学校に行き、建物疎開中に被爆し、亡くなった生徒三人分の制服です。帰ってこないわが子を探して、やっと見つけたぼろぼろの服の切れ端が一つのマネキンに着せられ、展示されていました。名前や写真も残っていて、親の深い悲しみが胸に突き刺さりました。また、袋町小学校資料館では、校舎の壁に家族の安否を尋ねる書き置きが残されていました。必死で家族を探す姿が私の頭の中に浮かびました。

広島平和使節派遣を通して、戦争の記憶を「体験として受け取る」ことの大切さを実感しました。被爆者の語りや資料館の展示は、教科書を読むことでは伝わらない感情や空気を含んでいて、心に深く刻まれました。

さらに、同じ平和使節派遣団の長崎のグループの高校生が「東京では東京大空襲を学ぶんでしょ。」と声をかけられた話をしてくださって、私はとても驚きました。東京に住んでいながら、東京大空襲について深く学んだ記憶がほとんどなく、実際にどんな被害があったのか、どんな人々が犠牲になったのか、具体的なイメージを全く持っていなかったことに気づいたからです。広島・長崎の原爆については語られることが多いけれど、東京大空襲は10万5400人もの人が亡くなったとされるのに、住んでいる私たちが何も知らないことに疑問をもちました。

戦争の記憶は、誰かが語ってくれるのを待つのではなく、自分から学びに行かなければならないのではないだろうか。曽祖母から語られなかった沖縄戦、東京で語られることが少ない東京大空襲、そして広島で出会った被爆者の声。それぞれが異なる形ですが、どれもが大切な記憶だと感じます。広島での体験は、過去を知るだけでなく、自分の足元にある歴史にも目を向けるきっかけになりました。これからは、戦争の歴史を忘れることのないよう、周りの友達や家族などにも体験したこと、思ったことを伝え、未来に繋いでいきたいと思います。

広島を訪問して、その「使命」を託された一人であると感じることができました。

知る

伊藤学園　富樫　蓮月

私の広島の第一印象は、本当に原爆が落とされたとは感じられないということだ。路面電車に乗り、広島の町並みを眺める。辺りには、ビル、信号機、笑いながら話す人々、そんな見慣れた風景しかなかった。強いて言えば、道路の真ん中に線路があるところが東京と違かった。しかし、3日間を通して私の思いは変わった。

まず、被爆者講話を聴いて戦争に対して、気持ちが変わった。6歳の時に被爆した桒本さんは、学童疎開をしていたそうだ。「爆弾が落ちて死んでもいいから市内で母と暮らしたい」これは、私が特に衝撃を受けた言葉だ。空襲が激しく学校に行っても帰らなければいけない、食べ物が無くなると犯人にされる、お腹が空いていてみんなイライラしている、こんな生活を想像すると胸が苦しくて仕方がなかった。また、原

爆が落とされ沢山の人が命を失い、生き延びた人たちも病気などで命を失ったことに強く悲しさを感じた。私は戦争について、知識として理解はしていたものの、お話を聞いて様々な感情が出てきた。当時の人々は、想像できないほどの苦しさや悲しさがあったと思う。しかし、これを他人事として考えてはいけない。私たちは、毎日学校に通いご飯を食べられる平和な環境に感謝し、同じようなことが繰り返されないために、平和を訴え続けることが必要なのだ。

次に、印象に残っているのは、平和記念式典でのこども代表の平和への誓いだ。一つ一つの言葉から力強い思いが伝わってきた。特に、「どんなに時が流れても、あの悲劇を風化せず、記録として被爆者の声を次の世代へ語り継いでいく使命が、私たちにはあります。」という言葉に圧倒された。小学６年生の２人だったが、強い責任と信念を持っており、自分も当事者意識を持たなければいけないと改めて思った。被爆から 80 年が経ち、被爆者の方々から、直接話を聞く機会は少なくなっている。私たちが中心になり、思いを語り継いで、平和な世界を継続する必要がある。

この２つの経験を通し、共通して考えたことがある。私は、これまで戦争について知る機会はあったが、現実として受け止めるが難しく、「戦争は二度と起こしてはいけない」としか考えていなかった。しかし、広島で色々な人の思いを直接感じたことで、自分が次の世代へと繋ぎ、1945 年８月６日を絶対に忘れてはいけないと考えるようになった。また、現地に行くことで、教科書や動画では感じ取れない思いを知ることができた。これからは、広島平和使節派遣で思ったこと、考えたこと、知ったこと、気づいたことを周りの人に伝え、少しでも平和を創り上げていくための力になれたらと思う。そして、戦争を経験していない人々が戦争について理解し、平和への意識が変わるよう、事実を知ることの大切さを伝えられるようになりたい。

「広島で感じた思い」

豊葉の杜学園　岡住　ひなた

実際に広島に行った感想を一言で表すなら？そう聞かれたら私は「被爆者の思いや伝えたいことを多くの場面で学んだが、それと同じぐらい今の当たり前がどれほどに尊いものなのかを学んだ」と答えます。広島にいた三日間ずっとこのことを思い続けていました。

最初に印象に残ったのは、被爆者講話で桒本さんから原爆が落とされた当時の話を聞いたときです。私たちの日常生活の中では、食料が全くなくなることなんてないし、お母さんに長い間会えないなんてこともない。今の日常生活と一番かけ離れていると思ったのは、人間の体が簡単に溶けてしまったり焼けただれてしまったりしていたことです。その姿は、まるでアニメや映画などのフィクションで目にするようなものでした。でも、今言った三つのことは原爆当時には当たり前のようにあったり、いたり、起こったりしていました。この三つ以外にも色々と今では考えられないことも当時は当たり前、普通に起こっていたとおっしゃっていました。そんな今では考えられない当たり前の中で過ごしてきたからこそ今平和であるこの時を大切にしてほしいという桒本さんの願いは私の心にとても響きました。

次に印象に残ったのは、袋町小学校平和資料館を見学したときです。そこには被爆した時とほぼ変わらない形の黒板や壁、ドアなどが残っていました。黒板は被爆時に自分の名前を書いて、安否や所在を伝えるために利用していたり、

家族の名前を書いて互いに居場所を伝えあったり手がかりを探したりするために使われていました。このことからも、当時は皆、家族や知人に再会することを生きる希望にしていたのではないかと強く思いました。そのような当時の雰囲気を袋町小学校平和資料館に実際に行って感じました。

最後に、私が今回の広島に行った際特に大きな思いを感じたのは「千羽鶴」です。千羽鶴は私たちも事前に作っていたのもあって身近に感じていましたが、いざ色々なところからたくさんの千羽鶴が送られたのを見たときはこんなにも多くの人が平和への思いをこめて折ったのかと驚きと迫力を感じました。鶴を折った人たちがもつ平和への思いは私の想像をはるかに越えたものだと気づき、とても印象に残りました。

私がこの広島平和使節派遣で学んだことは、被爆者の方々の思いや今ある当たり前の大切さを私も他の人に伝えることが出来るということです。今回広島に行ったのは学校で私一人だけです。しかし、私から一人、また一人へと多くの人に少しでも原爆について興味をもってもらいたいです。そしてたくさんの人の記憶に残るように私が経験したことを伝え続けていきたいです。

広島派遣　感想文

大崎中学校　山本　裕斗

私は広島平和使節派遣に参加して、想像もできないような戦争と原爆の悲惨さを目の当たりにし、改めて戦争について考えることができました。また、平和とは何かと自分の中で考えることもできました。

平和記念資料館では、目を背けてはいけない残酷な原爆の現実をたくさん突きつけられました。一瞬で焼け野原になった市街地、全身に火傷を負った死体で埋め尽くされた川など、とても悲惨なものを目にしました。あんなに多くの建物が被爆と同時に崩れ、壊れ、全ての人の日常が一瞬で破壊されたということは、自分の街で想像をしたらとても辛い気持ちになったと同時に、二度と原爆のようなものが落とされてはいけないし、平和を大切に考えていかなければならないと強く思いました。

また、8月6日に私たちは平和記念式典に参列しました。今回の平和記念式典では戦後80年のため、多くの方々が広島に集まり過去最多の55,000人が参列、海外から来た方も多くいました。私が実際に平和式典に参加し、大勢の中の一人となったことで、「平和」という同じ願いをもった人々が人種関係なく、全世界から一つの場所に集まって、同じ場所、時間を共有するということが、とても意味のあることだと感じました。

私が思う平和とは日常を当たり前のように過ごせることだと思います。今までの私は、「戦争が日本で起きる」ということを考えもしていませんでしたが、広島派遣に行って、戦争が起きないということは当たり前じゃないと知ることができました。戦争がなく、今までの日常を当たり前として過ごせることこそが平和だと考えます。そして、私たちが世界平和を願い、世界平和に近づけることとしてできることは、戦争や原爆について少しでも知ることだと思いまし

た。戦争が身近でない私たちだからこそ、どんな方法でもいいので、一人一人が戦争の悲惨さ、また原爆の恐ろしさについて、考えることが大事です。今回の経験を糧に、少しでも皆に平和について考えてもらえるように、私もさらに平和について深く考え、原爆の悲惨さを伝えていきたいと思いました。

「微力だけど、無力ではない」これは、3日目の碑めぐり講話のガイドをしてくださった寺本さんのお言葉です。私が学校で発表する対象人数は数百人です。日本の人口から見るとちっぽけな数字で、世界平和を広めるのには意味がないように見えるかもしれません。しかし、それは全く意味がないということではないと気づかせてもらいました。私は、この言葉を心に留めて学校での発表に挑み、一人でも多くの人に平和についての意識をもつきっかけになってもらいたいと思いました。

13歳の私にできること

浜川中学校　廣田　ゆら

今回、本や映像でしか知らない広島での出来事を、自分の目で見て、被爆者の方の話を実際に聴き、色々なことを感じたいと思い、広島平和使節派遣事業に参加しました。

私が見た広島は、とても綺麗な街でした。80年前に原子爆弾が投下されたとは思えないほどでした。ただ、街のいたるところに原爆の恐ろしさを伝えるものが残されていました。原爆ドームもその1つです。楮山ヒロ子さんは「あの痛々しい産業奨励館（原爆ドーム）だけがいつまでも、恐るべき原爆を世に訴えてくれるだろう」と亡くなる前の日記に記しています。この方も、1歳で被爆し16歳で白血病により亡くなりました。このように、原爆の後遺症により、被爆後も苦しみ続ける人が多くいました。

広島平和記念資料館を見学して、実際に亡くなった14万人の人生が1つの原子爆弾によって壊されたということ、そして被爆して命が助かった人にも体や心に大きな傷が残ってしまったということを改めて痛感しました。何度も言葉では言い表せない気持ちになりました。被爆した方の講話の中で、当たり前だと思っている日常が一瞬にして当たり前では無くなること、支え合い、助け合うことの大切さを学びました。

広島平和記念式典で、広島県知事の湯崎英彦氏は核抑止論に対し強い疑問を投げかけていました。核抑止論とは、自国や同盟国が攻撃を受けた際に核兵器で報復できる能力を備えておくことで、敵に攻撃を思いとどまらせる考え方です。湯崎氏は、抑止力から核という概念を取り除かなければならないと述べています。今も核を持ち続けている国があります。私には理解できません。また同じことが繰り返される、広島・長崎以上の悲劇が起こると思うと怖いです。絶対に止めなければいけないと思います。武器を使うのではなく、話し合いで何事も解決することが大切だと思います。

今回広島から戻ってきて、もう一度歴史を振り返ってみました。歴史の事実を知るとともに、その時の国の指導者がどのような思いでその判断をしたか、1方向だけでなく違った角度からも見ていくことが大切だと思います。

今の私に出来ることは微力ですが、見て、聞いて、感じたことをいつか原爆の被害にあった方々がいなくなった世界でも伝え続けていくことです。そして核抑止論から核をなくし、核兵器廃絶のためにどうすれば良いのか考えていきたいです。平和とは？個々に思い描くものがあると思います。私は、戦争がなく、安心安全に暮らせること、みんなが笑顔でいられることだ

と思います。

いつか機会があったらではなく、ぜひ、広島・長崎に行って自分の目で80年前にあったことを見て、聴いて、感じてください。

平和な世界を作るために

荏原第五中学校　清水　陽太

今年は広島原爆投下から80年です。被爆者のいない世界が、もうすぐ来ようとしています。戦争のない世界に近づけるために僕たちには何ができるのでしょうか。その答えを探すべく広島平和使節派遣に参加しました。

広島平和使節派遣では、被爆者の桒本勝子さんから当時の話を聞きました。桒本さんは1939年生まれでその頃には戦争は始まっていて、食糧不足で飢餓に悩まされた人がたくさんいたそうです。桒本さん自身も3歳頃の思い出はお腹が空いた事と言っていました。また、食糧が無いため人々がイライラして、よく争いや喧嘩が起こっていたそうです。桒本さんは6歳の時に被爆しました。被爆した直後の広島市内は、そこら中に死体が転がっていてすごく悲惨だったそうです。僕は、桒本さんにあなたにとって平和とはと聞きました。桒本さんは毎日勉強をできたり、生きていられる事が平和だと答えてくれました。この事を聞き、自分たちが生きていることは、とても幸せなのだと思いました。

原爆資料館では、原爆の被害や影響を当時の写真や資料で知り原爆・戦争について、当時の人々の気持ちや今に伝えたいことを深く考えさせられました。遺品も展示されており原爆が落とされるまでは平和な日常があって今の自分たちと変わらない生活をしていたのだと感じました。僕は、衣服が引き裂け皮膚が垂れ下がり、この世の人とは思えぬ姿の負傷者の絵が、当時の人々の辛さや原爆の恐ろしさを強く表していると感じ、心に残りました。

平和記念式典では、広島市長が、自分よりも他者の考えを重視する考え方を優先する事が大切だと言っていました。その言葉は僕達が学校で人と接する時にもすごく必要なのだと思いました。広島市内の小学生も平和宣言をしたり、たくさんの人が灯ろう流しをしたり、平和を願っている人が自分が思っていた以上に多くて、自分の平和への意識が高まりました。

僕は、広島平和使節派遣に参加して、平和とは、当たり前な日常が当たり前に過ぎていくことだと感じました。実際に被爆者の方からお話を聞いたり、資料館などを訪れることで、原爆の被害の実態や犠牲者の方々の思いに触れることができ、平和の重要性を改めて認識しました。また、平和について考える機会を持つことで、自分自身の平和への意識が高まり、今後も平和を守るために何ができるかを真剣に考えるきっかけとなりました。多くの資料や展示を通じて、戦争の悲惨さだけでなく、平和を築くための努力や希望も感じとることができ、非常に良い経験となりました。現在は被爆した方のほとんどがこの世を去っていて、被爆者の方から直接話を聞けるのは今年で最後だったかもしれないという状況です。そんな中、戦争のない世界に近づけるために僕達が戦争・原爆の恐ろしさを伝えていくべきではないでしょうか。この経験を活かし、今後も平和の大切さを伝える活動や自分にできることを続けていきたいと思います。

「あの日を越えて、平和をつなぐ」

日野学園　秋山　優香

「微力だけど、無力じゃない」――広島派遣が終わってからも、この言葉がずっと頭の中を

こだましていた。これは、広島平和記念公園で碑巡り講話をしてくださった寺本真理子さんに教えていただいた言葉である。核なき世界をつくるために、一人一人ができることを重ねていけば、世界は変えられるのだろうか。

私はこの夏、広島平和使節派遣に参加した。広島は、世界で初めて原爆が落とされた場所である。広島には今もなおそこに平和への願いが生きていた。

まず初めに私たちは被爆者講話を聞いた。講話をしてくださったのは、6歳の時に被爆したという桒本勝子さんである。桒本さんの話からは、原爆の悲惨さや恐ろしさが伝わってきた。広島は火の海と化し、たくさんの火傷をした遺体が倒れている。そんな情景は、あまりにも痛々しく、想像もできなかった。その原爆は教科書や資料集で見る原爆とは全く違った。これまで、私は原爆を何年に起きる、何万人の被害者、など、数値でしか見てこなかった。だが、話を聞いて、本当の原爆の悲惨さを知った。

8月6日、私たちは平和記念式典に参加した。平和記念式典には、たくさんの人が訪れていた。中には外国の方も多くいて、広島の原爆というものが世界的にも大きな歴史なのだと思った。そして、8時15分に、黙祷が行われた。沈黙の中で、人々の平和への祈りが水面に波紋が広がるように静かに満ちていった。

その後、私たちは平和記念資料館に向かった。ここでは原爆の被害や影響を当時の写真や資料で知ることができる。その中には目を逸らしたくなるような残酷な展示もあった。平和記念資料館に並ぶ遺品の数々が、原爆の真実を私に語りかけているような感じがした。

そして次の日、私たちは平和記念公園内の石碑を巡りお話を聞く碑巡り講話をしていただいた。特に印象に残ったのが、被爆アオギリの話である。被爆アオギリは、原爆により被害を受けて枯れ木と化してしまったが、原爆投下の翌年の春、芽吹き、人々に生きる勇気を与えたのだという。沼田鈴子さんも勇気を与えられた一人である。沼田さんは、21歳で被爆し、片足を切断、さらに婚約者も戦死してしまい、生きる気力を失っていた。そんな中、被爆アオギリの姿に力をもらい、生きる希望を見出せたのだという。その後、修学旅行生などに向けてアオギリの下で語り部の活動を始めたそうだ。被爆アオギリは、原爆の被害と平和の大切さを無言のうちに語り続けているように感じた。

この碑巡りの後に聞いたのが、「微力だけど、無力じゃない。」という言葉である。一人にできることは少なくても、その小さな力の積み重ねで、平和を作っていける。私は、この広島平和使節派遣で学んだことを、一人でも多くの人に伝えたい。被爆者の高齢化が進む中、私はこれからの未来を担う世代である私たちが原爆の恐ろしさを伝え、受け継いでいくことが大切だと思う。微力でも、平和への想いを胸に、私はこれからも伝え続けていきたい。

広島派遣に参加して

荏原平塚学園　佐原　菜那子

私は広島派遣で原爆への印象が大きく変わった場面が2つある。

1つ目は被爆者の講話を聞いたときだ。今まで私がイメージしていた原爆とは実際の被害の大きさが大きく異なることを知った。今までは、爆心地から見えているところが一気に燃えて建物が崩れた、たくさんの方が後遺症に悩まされたなどと本や資料で知った情報のみで被害のイメージができあがっていた。また、川が死体で埋め尽くされていること、自分の家族かわから

ないほど火傷が酷いということ、その惨劇がどのようなものだったのか、詳しいイメージがついていなかった。しかし、被爆者の講話で、原爆の悲惨さを肌身で感じることができた。まず、思い出したくもない原爆の辛い記憶を私たちに伝えてくださった被爆者の姿が印象的だった。その方は、親戚の家に疎開していたとき、6歳で被爆されたそうだ。食料が足りず、それが原因で同居人との争いもあったそうだ。原爆で人々の生活だけでなく、冷静さも奪われてしまったようで心が痛んだ。一つ一つのお話に原爆の悲惨さが刻まれていた。また、講話だけでなく、大勢の被爆者から寄せられた被爆の絵を見る機会があった。絵にはたくさんの死体が浮いている川が描かれていて、本当にあった悲惨な光景だということを改めて実感することができた。

２つ目は、平和記念式典に参加したときだ。小学生が平和への誓いを思いを込めて話していた。私も何か行動するべきだと心を動かされた。海外の方もたくさん参列されていて、日本人のみではない原爆への意識を感じたと共に、原爆の被害者は日本人だけでないことに改めて気がついた。それは平和記念公園内での碑巡りでも感じた。韓国人の被爆者を慰霊する碑では数万人もの死没者名簿が収められていた。その中には生活のために、日本に行かざるを得なかった方が多かったそうだ。そこで原爆の被害に遭い、多くの人が命を落とした。被爆者やその家族のことを思うと、心痛で言葉にならないほどだった。

私は今回の派遣を通して、広島に行くまでは知ることのなかった本当にあった悲惨な出来事、多くの人の平和への熱い思いを知った。もう二度と争いで苦しむ人が出ないように、今回の経験で印象に残った「何事も話し合いを１番に。」という言葉を胸に自分の平和の理想像を深め、それに向かって努力していきたい。この経験と今の思いを無駄にしないようにまずは友達や家族にこの思いを伝えていき、人任せにせず自分から行動し、平和の大切さを広められるようになることを目指す。平和な世界の実現には一人一人が当事者意識をもつことが大切だと考える。周りに頼るのではなく、自分自身が責任をもって行動していきたい。

「広島で学んだこと」

鈴ケ森中学校　千葉　柑奈

今回、広島に行き、グループの課題である「当時の人々はどのような気持ちだったのか」と個人の課題である「原爆の恐ろしさを深くまで知る」ということについて学びを深めることができました。

当時の人々の気持ちは、被爆者講話で大部分を知ることができました。また、広島平和記念資料館でも当時の様子を知ることができました。この二つの経験は、戦争を体験していない私にとってとても大きなものでした。そして、これまでは調べて学んだことで全てを知ったように感じていましたが、本当は全くわかっていないことに気がつきました。講話を聞いている時は悲しい現実を突きつけられ、想像すらできない言葉が次々と出てきて、話を聞いているだけで言葉に言い表せないほど悲しく、苦しい気持ちに襲われました。さらには「私には全てを理解

することができない」と感じたことで、戦争経験者と非経験者の差に強く悲しみを覚えました。

しかし、同時に「理解できるような状況にはなりたくない」とも思いました。平和な日本を生きているからこそ理解できないものなので、「このまま平和で戦争とはどのようなものなのか理解できないままで良い」と思いました。当時の方々が紡いでくれた今の平和な日本に感謝しながら過ごしたいと思いました。

袋町小学校平和資料館では、壁に書かれた被爆者の消息を知らせる伝言が当時のまま残されていました。私はなぜかその壁からしばらくの間、目が離せずにいました。「当時の人々はどんなに必死な思いで書いていたのだろうか」となんとも言えない気持ちでした。

碑めぐり講話では、碑の意味や歴史について丁寧に教えていただきました。原爆の子の像のモデルとなった佐々木禎子さんは折り鶴を約1,400羽折ったと知りました。1,000羽折ると病気が治るという言い伝えを信じていた禎子さんが、1,000羽折ったのに病が治らないまま死んでしまい、どんなに悲しく絶望したのだろうと考えたのを強く覚えています。

また、お好み焼きが広島の名物になった理由も印象に残っています。そこには、未亡人等の方々が残り物で簡単に作れるお好み焼きを売ってお金等をもらうためだという理由があったことを教えていただきました。そこには、強く生きようとする気持ちがあったのではないのかなと思います。

そして、今回の活動の中で一番記憶に残っているのが、広島平和記念資料館です。資料館は当時の人々の気持ちと原爆の恐ろしさを同時に感じることができる場所でした。そこには原爆が炸裂した時に生じた熱によって表面が溶けた瓦や爆風によって倒壊してしまった広島物産陳列館、今の原爆ドームの模型と炸裂前の原爆ドームがあり、破壊力の凄まじさに強い衝撃を受けました。そんな中でも生き残れた人がいて、今でも語ってくださることに、人間の強さと命の尊さを感じ、まるで奇跡のようだと思いました。これからは平和であることを当たり前と思わずに暮らしていきたいと思いました。

広島に行く前と行った後

冨士見台中学校　吉野　輔

僕がこの題名にしたのには理由があります。それは小学校の頃戦争の本を読んだり小学生の歴史で少し触れたりしたので日本は戦争をして、アメリカに原爆を広島と長崎に落とされたことを知っていました。そのとき僕は可哀想だなとアメリカは酷いなとしか思っていませんでした。

ですが広島に行っていろいろなことを知って可哀想や、アメリカは酷いな。としか思わなかったことが何回もコロコロ変わりました。例えば被爆者講話では最初広島と長崎に落とされた原爆の効果は何も発表されていなかったそうです。だから生き延びてもなんの病気で死んでいったのかは分からないままだったそうです。だからこのときの僕は、なんで当時の日本は原爆の効果を発表しないのだろう。発表したら治療ができるかもしれないから助かるかもしれないのにと思い、その時の僕は日本も酷いなと思いました。他にも平和記念式典に参列したり、平和記念資料館に行って感じたこともあります。今年は終戦80年という締めくくりの年なのでたくさんの人が式典に参加しに来ました。暑い中ですが、その場にいた全員最後まで集中して話を聞いていました。僕たちはその後、平和記念資料館に行きました。資料館にもたくさんの人がいました。資料館にはいろいろな原爆

に関する写真や資料などがありました。こんなにも平和記念式典や資料館に人が集まったり、当時のものが展示されたりしている理由が広島に行って分かりました。それは広島と長崎を原爆が落とされた最後の都市・国にしようとしていることです。長崎は行っていないので、どのようなことをしているかは僕自身全部は分かりませんが、広島は口だけではなくきちんと行動で原爆を落とされた最後の場所にしようとしているということを感じ、今までの歴史に目を逸らさずしっかりと受け止めていこうという決意をとても感じました。

僕がこの広島派遣で一番感じたことが変わったことは碑めぐり講話でした。碑めぐり講話は原爆ドームの周りを一緒に巡りながらお話をしてもらうというものでした。僕たちのグループのガイドさんは中川俊昭さんという人で、お母さんが原爆を経験したそうです。中川さんと周っているとき僕は質問しました。「なんで日本に原爆は落とされたのですか？」と聞きました。そしたら中川さんは「アメリカは戦争を終わらせるために使ったのだと思う」と言っていました。この終わりの見えない日本との戦争を終わらせるためにだと思うとアメリカは酷い国だな、としか思っていなかった僕が恥ずかしい気持ちになりました。このように、僕は広島平和使節派遣に参加して行く前と行った後ですごい感じ方の変化を感じました。だからこそ、この題名にしました。

「私が広島派遣で感じたこと」

荏原第六中学校　長谷川　ゆから

私が広島平和使節派遣に参加した理由は、2つあります。一つ目はもっと視野を広げること。二つ目は多くの人に自分が感じたことを伝えたいと思ったからです。私は、小学校高学年の頃に沖縄県の渡嘉敷島に住んでいました。渡嘉敷島では戦時中に集団自決があり、学校や地域では多くの平和学習が行われていました。渡嘉敷島で集団自決や沖縄戦について学び、当時の生活や集団自決を決意した時の心情などを初めて知りました。私は、戦争について知らないことだらけだという事に気づくことが出来たと同時に、自ら戦争について調べたこともなく、これまで戦争や平和に関心をもってこなかった自分に驚きました。少しずつ日本や世界の戦争の事を理解していくと、自分も戦争や紛争で困っている人を助けたいと思うようになりました。しかし、世界の人を助けるためにはまず、自分の国で起きたことを知らなくてはいけないと思い、広島平和使節派遣へ参加しました。

戦後 80 年という節目に広島に行き、平和記念式典に参加できたことや被爆者の方にお話を聞けたことなど、広島で多くのことを知ることができたと思います。写真や映像でない原爆ドームを見た時は、本当に広島に原子爆弾が落ちたのだと改めて痛感する出来事のひとつとなりました。後日ガイドの方に広島平和記念公園の説明をしてもらった時、爆心地から 170m の場所にいたにも関わらず偶然地下にいた野村さんが生き残ったことや、放射能も当たり方で症状が全く違うことを聞いた時は、ほんの少しの違いが生死を分けることへ繋がるのだと知れました。

また、実際に平和記念資料館へ行った時の中の重たい空気と、モノクロ写真でも伝わるほどの生々しさにぞっとしたことをしっかりと覚えています。見上げるほど大きな写真に写った骨の山や血に染まった洋服、焼けこげたお弁当、原爆症に苦しむ人たち。あの原子爆弾が落ちる前も後も、広島には沢山の人が生きていたのだと強く伝わってくるものばかりでした。

私は、今回の広島派遣を通して、広島で起きたことは絶対に忘れてはいけない、繰り返してはいけない事実だということを改めて感じることができました。今後、日々の小さな助け合いなど皆が笑顔で幸せになるようなことを沢山できるよう、今まで以上に周りを見て行動していきたいです。今回経験できたことは成果発表で学校の人に伝えるだけでなく、人生を通じて、もっと多くの人に伝えていきたいです。具体的には、私の夢の１つには、海外青年協力隊に入ることがありますが、そこで出会うことになる沢山の人達にも今回の広島の体験を伝えていきたいと思います。それまでに、今回の経験について、今は言い表せないことも言語化できるようにしていきたいです。

平和な未来のために

八潮学園　實川　希衣

「平和とは何ですか。」

派遣前に聞かれていたら、私は答えられなかっただろう。私は中学生広島平和使節派遣生として広島に行き、「平和とは何か」を見つけてきた。

被爆者の方は「普通の生活が一瞬で奪われた。」とおっしゃっていた。私はその「普通の生活」とは家族みんなで暮らせること、友達と楽しく笑いあうこと、将来について考えること、などいつも私達が当たり前に行っていることなのだと思う。

私は毎日学校に行き、勉強をして、友達と話し、家に帰ったら家族で食卓を囲みご飯を食べる。この当たり前の毎日が続いていくことについて、深く考えたことはなかった。だが、実際に広島を訪れ見た事実には、その私の毎日の「当たり前」がどれほど大切なものか教えてくれた。平和とは探していくのではなく、いつも過ごしている日常の中にあると強く感じた。

２日目には平和記念式典に参加した。8 時 15 分、黙祷を行っている時、80 年前のこの時間に賑やかだった広島の町、大切な人と暮している人々、一発の原爆は全てを奪ったのだと思うと胸が締め付けられるような気持ちになった。平和への誓いでは小学六年生という私より年下の子が平和への気持ちを語っていた。「私たちが被爆者の方々の思いを語り継ぎ、一人ひとりの声を紡ぎながら平和を創り上げていきます。」という言葉が印象に残った。私は日常の中にある当たり前のことが平和だと考えた。でも世界のどこかでは今も戦争が続いていて平和に暮らせていないところもある。だからこそ一人ひとりの想いを大事にする。今、平和でないところがあるなら人々が平和を創り上げていく、ということを学んだ。

「平和の子の像」の周りにはたくさんの折り鶴が飾られていた。それには世界中の人々の「平和への願い」、「二度と戦争を繰り返さないでほしい」という願いが込められている。私もその気持ちは同じだ。私たちも鶴を折り捧げた。一羽一羽に平和への願いを込めて折った。その小さい鶴がたくさん集まるということには、人々からの平和への願いの強さが表れていると思う。

広島の学習を通して、私が思う平和とは、「当たり前のことができる生活」だ。そしてこれは今回の派遣で一番深く考えたことだ。私が過ご

しているこの毎日は、実はかけがえのない平和の証であることを忘れてはいけない。私は広島で学んだことや感じた衝撃を、多くの人に届けていくことが、私ができる平和を創り上げていくことだと信じている。二度と同じ過ちを繰り返さないために、中学生広島使節派遣生として、今回学んだ「平和の大切さ」を忘れずに後世に伝えていくことが私の役割だ。そしてみんなで平和な世界を創り上げていきたい。

未来への誓い

品川学園　仲川　結

平和は誰に与えられるものなのか、それとも自分たちがつくりだすものか。

「平和とは何だろうか。」広島に派遣されて平和学習をしたとき、私はこの問いを心の中で何度も繰り返しました。

被爆者の方のお話を聞いたとき、胸が締めつけられるような気持ちになりました。その方は、原爆が落とされた瞬間の街の様子を語ってくれました。まるで地獄のように真っ黒な煙が立ちのぼり、建物は一瞬で壊れ、街中が炎に包まれたそうです。家族や友達を失い、自分も大きなけがを負いながら生き残ったときの苦しみを、涙をこらえながら話してくれました。私は耳をふさぎたくなるほどつらい話でしたが、同時に「この現実から目をそらしてはいけない」と強く感じました。戦争は人の命や夢や大切なものを一瞬で奪ってしまうことを、改めて突きつけられたからです。そして、今自分があたり前のように家族と食事をして、友達と笑って過ごしている日常は、実は奇跡のように尊いものなのだと気づきました。

そのお話を聞いて、私は自分自身に問いかけました。「もし自分が同じ立場だったら、生きる希望を持てるだろうか。」きっと、答えは「いいえ」です。想像しただけで怖く、悲しく、苦しくて仕方ありません。しかし、被爆者の方は苦しみを背負いながらも「同じことを二度と繰り返してはいけない」という思いで、今も私たちに語り続けてくださっています。その強さと優しさに、心から尊敬の気持ちを抱きました。そして私は思いました。「この思いを受け取った私が、次の世代につなげていかなくてはならない」と。

これからの自分にできることは何だろうか。私はまだ中学生で、世界の平和をすぐに作り出すことはできません。だけど、小さな一歩なら踏み出せるはず。たとえば、身近な友達や家族と「平和ってなんだろう」と話すこと、戦争や原爆のことを忘れずに心に刻むこと。そして、争いやいじめを見て見ぬふりせず、相手の気持ちを考えて行動すること。それはほんの小さなことかもしれません。でも、その小さな行動の積み重ねが、やがて大きな力になっていくのではないでしょうか。

私はこれから、広島で学んだことを胸に、平和の大切さを伝える一人になりたいです。被爆者の方が必死に語り続けてくださった想いを無駄にせず、自分の言葉で伝えていきたいです。そして大人になったときには、戦争や争いのない世界をつくるために、自分ができることを選び、行動できる人でありたいと思います。

「平和とは何だろうか。」その答えは、まだはっきりとは分かりません。しかし、確かに言えるのは、平和は誰かに与えられるものではなく、一人ひとりが守り、つくり出していくものだということです。私はこれからも学び、考え、行動し続けます。そして、必ず「平和な未来をつくる一人」になっていくことをここで誓います。

4. 被爆者講話

講師　桒本（くわもと）　勝子（かつこ）　さん

【桒本氏】遠いところから御苦労さまです。

私、ここに本を持っておりますが、これは20年前、被爆60周年に広島のNHKが、「当時のことを覚えている方は絵にして送ってほしい」って募集されたんです。それまで絵を描いたこともないような素人の方が、みんな一生懸命描いてNHKに応募されたんです。それで、NHKが1冊の本にして、私たちにくださったんです。たくさんの絵が入っていますから、回しますから見てみてください。

被爆80周年になるから、私は6歳のときに被爆しました。だから、今年86歳になります。おかげで元気なので、こうやって皆さんとか、いろんな方に話をさせてもらっています。

私が生まれたのは1939年です。昭和で言うと昭和14年です。生まれたときには、もう日本の国は戦争していました。

それで、初めは赤ん坊だから分からないんですけど、だんだん大きくなるにつれて、世の中に食料がないということに気がついたんです。お腹が空いて、3歳半頃から記憶に残っている限り、小さいときの思い出といったら、お腹が空いたことだけなんですよね。

どうしてかというと、日本の国では、昔からお百姓さんが田んぼで稲を作ってくださって、畑でいろんな作物も作ってくださって、それから、牛や豚を飼ってくださる方もいて、そうしてできた作物とかいろんなものを国が全部集めて、その後に私たち国民に平等に分けてあげますという制度ができたんです。

ですから、勝手に物を売ったり買ったりしてはいけないんです。だから、私が覚えている限りでは、お店というものが一切ありませんでした。それで、国が国民に供出をさせるんです。できた作物や畜産物やら、全部集めるんです。

お腹空いた、空いたって言いながらも、6歳になったときに小学校に入れることになったんです。何だかうれしくて、小学校に入学したんですけど、それが昭和20年です。

昭和20年っていったら、どういう年か御存じですよね。原子爆弾が8月6日に落ちた日、それから、8月15日に日本が戦争に負けましたって宣言した日です。

初めは、喜んで小学校に行き出したんですけど、その頃になったら、広島でもしょっちゅうアメリカのB29という最新鋭の軍用機が飛んでくるんです。それで、飛行機が来たら、広島中にけたたましいサイレンが鳴りまして、それで皆さん避難するわけです。防空壕のある人は防空壕に潜り込んだりしましたが、私たち広島市内に住んでいる者は丘陵地がありませんので、座敷の畳を上げて、畳の下の縁の下の土を掘って、そこへ逃げ込んでおりました。

でも、小学校に入って、もう間もなく空襲

がとても激しくなって、朝、学校行って机の上に教科書やノートやその他の学用品を並べて、先生が来てくださるのを待っていると、B29が飛んできてサイレンが鳴るんです。そうしたら、先生が「荷物を片づけて帰んなさい」って言われるんです。今来たばかりなのに、並べた学用品を全部ランドセルの中に詰め込んで、走って帰るんです。後から考えたら、そっちのほうが危険だったんじゃないかと思うんですけど、帰りなさいって言われると、否応なしに走って帰っていました。

でも、それも長続きしないで、1か月ぐらいたったと思うんですよ。ですから、ちょうど今で言う5月の連休ぐらいですかね。そういうときになったら、もうあんまり空襲が激しいので、小学校の子供たちは広島に住んではいけませんということになったんです。

それで、それぞれ、学童疎開と言いますけど、手近なところに親戚があれば、そこに子供だけ預かってもらう。それで、親戚のない子供たちは、学校の先生とクラスの残りのみんなと山の中のお寺に避難して、そこで勉強したり一緒に生活したりしていました。

私は、そのとき8歳の姉がおりましたので、姉と2人で父方のおばのところに預けられることになったんです。おばの家は、ちょっと市内から外れた郊外で、周りに田んぼや畑がたくさんある家でした。広島市内で生活しているときはとても食べるものに困っていましたけど、田舎に行くと周りに田んぼや畑があるんだから、当然、食べるものは市内で生活するよりは恵まれるだろうと思って期待して行ったんですけど、結局は同じで、本当に市内で暮らしているのと同じように、食べるものがなかったです。

おばの家で預かってもらうことになって行ったんですけど、私たちより前に、おばの姑に当たる人の親戚とかがたくさん避難してきているわけです。昔、牛や豚を飼っていた小屋にも床を張って、そこへ1つの家族が暮らすんです。だから、板の床を張っただけでトイレも何もないところですよ。

それで、お百姓さんが使う道具を片づけるところ、農機具小屋というのがあって、そこにも床を張って別の家族が住んでいるというような調子で、おばの嫁いだ家に、既に4家族ぐらい人が住んでいるんです。限られた場所に、そんな4家族がいるところに、私たち、8歳の姉と私と2人で預かってもらうことになったんですよ。

何も食べるものがないからお腹を空かせて、みんなイライラして暮らしているような感じがするんですよ。おなかがすいていたら、大したことでなくても腹が立ったりしますよね。それが、毎日毎日食べるものがないんですから、それはイライラするだろうと思うんですけど、すぐに誰かが、ここに置いてあった食べ物がなくなったって言い出すんです。誰が食べたんだとか、誰が取ったんだとか言っているうちに、結局、親がそばにいない私と姉が犯人にされるんです。全然、身に覚えがないのに。

それで一度、お米でも何でも4キロ入る大きな一斗缶があったんですよ。その缶にいっぱい大豆があるのがなくなったって、全部なくなったって誰かが言い出すんです。もう毎日、言い出す人は決まっていましたけど、誰が食べたんだ、誰が取ったんだって言っているうちに、私と姉が犯人にされるんです。6歳の子供って、大人にああでしょう、こうでしょうって言われたら、もう反論も何もできないから、結局は取って食べたことになる

んですよ。

皆さん、大豆というものを御存じだと思うんですけど、節分の日にまく大豆は、フライパンで煎ってあるような感じなんですよ。あれを御飯のおかずにしようと思ったら、お鍋でちゃんと炊かなきゃ食べられないんですよ。大豆を生で食べると、おなかを壊すから。

それなのに、生の大豆が4キロなくなったって、6歳と8歳の子供が食べたなんて常識では考えられませんけど、結局は私たち姉妹が取って食べたことになるんですよ。毎日、そういう生活が嫌で嫌で、早く家へ帰って市内で母と一緒に暮らしたいと思っていたんですよ。

ふだんの生活は、土曜日の昼に学校の授業が終わったら、姉と2人で市内で1人で暮らしている母の元へ帰って、土曜日の晩、一晩泊まって、次の日の夕方、また田舎のおばのうちに帰るという生活をしていたんですけど、本当に嫌で嫌でたまらなくなって、もう爆弾が落ちて死んでもいいからお母さんと一緒にここで暮らすって、2人で大きな声で泣いたんですよ。

そうしたら、近所の人が全部出てきてくださって、こういう状態で爆弾が落ちたら、小さいあなたたちを2人も連れてお母さんが逃げられないから、今日のうちに田舎へ帰んなさいって、みんなで説得してくれたんです。

そのときに、説得してくださったおばさん方の中に、冷たく冷やした大きな桃を私たちに1つずつくださったんです。あの頃、ああいうぜいたくなものがどうしてあったのかと後から考えたら思うんですけど、そのときは、いつもお腹空かせているからうれしくてうれしくて、それを食べながら、2人で機嫌を直して田舎の家に帰ったんです。

小学生は学童疎開しなきゃいけないけど、中学生は今までどおり市内に住んで、お父さんたちが兵隊に行って、人手不足になった工場とかいろんなところの手伝いをしなきゃいけないことになっていたんです。

それで、中学3年生は工場で働かなきゃいけなかったんです。工場というのは、飛行機の部品とかつくるようなところですよ。

1年生、2年生は何をしていたかというと、その時は4月以降ですから、3月10日に東京で大空襲があって、それで爆撃されたときに、家の周りが密集しているから、逃げ場がなくて焼け死んだ人が一晩で10万人もいらしたんです。そういうことが分かっていたから、広島には市内に空き地をつくりましょうという仕事があったんです。

どの家というのを決めて、今のように便利な機械があるわけじゃないから、誰か1人が屋根の上へ上って瓦を1枚ずつ下ろすんです。滑り台みたいに板で作って、瓦が全部下りたら、その家の主な柱に綱をくくりつけて、運動会のときの綱引き競争みたいに一生懸命みんなで綱を引っ張るんです。そしたら、時間はかかるけど中心の柱がぐらついてきて、家全体が壊れるんです。その壊れた瓦礫を片づける仕事を、中学校2年生、3年生の人たちがしていたんです。

その頃は男女共学じゃなかったですから、女の子たちは女学校に通っていたんですね。女学生たちは、郵便局のお手伝いしたり、病院で看護師さんのお手伝いをしたり、それから、広島に路面電車が走っていますけど、その路面電車の運転手も14歳ぐらいの女の子たちがしていたんです。そうやってみんな一生懸命働いていたんですよ。

いつもB29が来たら夜中でも昼間でもお

構いなしにサイレンが鳴っていたんですけど、本当に原子爆弾を落とす B29 が来たときは、何かの手違いで警報が鳴らなかったんです。

だから、朝の 8 時 15 分って、大体みんなどんなことをしていますか。お勤めに行く人は、外で歩いたり自転車へ乗ったり、それから市内電車へ乗ったりしていますよね。建物疎開に携わっている子供さんたちは、多分並んで出席を取ってもらっていたんだろうと思うんですよ。こうして並んでいるところに B29 が飛んできたんです。

それで、何か落としていって、それが原子爆弾だったんですけど、くるくる回って、太陽の光が当たってきらきら光って、とってもきれいだったんですって。みんなできれいなものが落ちてくるって、上を向いて眺めていたんです。だから、市内に住んでいる人って、何の警戒もなしに普段どおりの動作をしていたんです。そんなときに、今の平和公園のところで原爆が炸裂しました。

これが広島市内の絵ですけど、電車も走りながら燃えていました。外で働いている男のお子さんたちは、もうその場で座り込んだきり動けないんです。

左から 2 番目に、ここに目の玉が飛び出している方がいるんですけど、原子爆弾が落ちたときに広島市内の気圧が変わったんです。台風のときに気圧が変わるって言いますけど、その気圧が変わったときの風を後ろから受けたら、皆さん目の玉が飛び出されるんです。

たくさんの人が目の玉が飛び出されて、亡くなった方もいらっしゃるし、何とか生き長らえられた人でも、眼球がないんですから目が見えませんよね。目にガラス玉を入れて、ぱっと見たところでは目があるように見えるんですけど、本当は何にも見えないんです。それで生活している人が、戦後にもたくさんいらっしゃいました。

原子爆弾が落ちたときの広島市内の温度が 4,000 度です。4,000 度という温度が、皆さんは想像つきます？

家でやかんでお湯を沸かしますよね。それが沸騰したときの温度が 100 度です。でも、その 100 度のお湯が、もし誤って自分の手とか足とかにかかったら大やけどするんですけど、広島市内の温度が 4,000 度だったんです。だから、外におる人は、みんな例外なく大やけどしたんです。

それと、温度が高かったら自然に喉が渇きますよね。広島には、7 つの川の町って言われたぐらいきれいな水の流れる川が 7 本もあったんです。みんなそれを知っているから、川に行ったら水が飲めると思って川に行かれるんです。川で一口水を飲んだら、その場で皆さん即死されるんです。

それで、すぐに川の中に浮いて、いつまでも浮いていましたけど、潮が満ちると川上のほうに流れていって、引き潮になるとどんどん海のほうに流れていって、それを毎日毎日繰り返すんです。広島中の川がそういう状態になっても、遺体を助け上げてくれる人もいないんです。みんながけがをして、みんなが家を失っているんですから。

これが広島市内の地図です。真っ赤な色がついているところは全部、建物が壊れて燃えたところです。あの頃、80年前ですから、鉄筋コンクリートの建物なんか本当に数えるほどしかないから、ほとんどが木造です。市内の家がほとんど潰れて燃えてしまいました。

この赤いところが大体市内全部です。周りに少し黄色いところがあるのが、家は壊れたけど火災にはならなかったというところです。私たち姉妹は、この黄色いところで生活していました。

それで、真ん中辺に黒い掛け印あるんですけど、この真上の600メートルで原子爆弾が炸裂したんです。だから、ちょうど市内の中心になるんです。

これが今の平和公園の図です。この上に、ローマ字で言ったらTの字の、橋なんですけど、これが原子爆弾を落とす目標だったそうです。それが風にちょっと流れて、ここに来たんです。

原子爆弾が落ちたときに、私たちは学校に行っていました。それで、8時15分の少し前に用務員の方が、チリンチリンってベルを鳴らしてくださって、みんな教室に入ったところだったんです。今の掛け印があって、原子爆弾が落ちたところから私たちの学校は3.5キロ離れているんです。3.5キロというと、もし校庭で遊んでいる人がいたらやけどをする範囲だそうです。

授業開始のベルが鳴ったもんですから、みんな教室に入ったところだったんです。誰もやけどをする人はいなかったんですけど、3.5キロ離れたところでも、学校の窓ガラスは全部落ちて壊れました。粉々になって、たまたま運悪く窓のそばで遊んでいた同じクラスのお嬢ちゃんが壊れたガラスを全部頭からかぶったんです。

それで、頭や顔に傷ができ、本当大げさではなく噴水のように血が噴き出ているんですよ。それを、受持ちの先生が来られて、そのお嬢さんを抱えて何を思われたんか、運動場に出て行って、1人で校庭をぐるぐる走られるんです。

私たちも当時は6歳ですし、大きい子だって7歳ですから、自分で何か判断することというのはできなかったから、「先生、先生」って先生の洋服を引っ張って、後ろからこうしてついて走っているんです。1年生全体と先生が大けがをしたお嬢さんを抱えて、ぐるぐる校庭をいつまでも走っているんですよ。

どのぐらい走ったか全然覚えていないんですが、疎開しているうちのおばが学校まで迎えに来てくれて、家に連れて帰ってくれたんです。疎開先の家に帰って、ちょっと気持ちが落ち着いたら、広島市内で1人で暮らしている母親がどうなったかと思って、ものすごく心配になったんです。

そしたら、同じ家で暮らしている二十歳過ぎているいとこのお兄さんが、僕がおばさんを探してくるって。そのお兄さんは、片方の目が見えなくて、軍隊には入れなかったんです。学校の先生をしていたから、ずっと学校で働いていましたけど、僕がおばさんを探してくるって、大きなリュックサックを背負って、水筒にいっぱい水をくんで出かけていったんです。

お母さんを探してきてくれると思って、うれしくて待っていたんですけど、ほんの10分も経たないうちに帰ってきたんです。どうしたのって聞いたら、家を出て5分歩くか歩かないうちに、もう目の前が全部火の海で進むことができないって帰ってきたんです。

さっきも言いましたけど、この黄色いところに私たちが住んでいて、市内に出るには、こっちから回ろうと思ったら、大きい川があるから船がないと渡れない。向こう側へ回ろうと思ったら、ここは山ですから、山越えをしなきゃ行かれないわけです。そんなので市内に出るにはとにかく真っすぐの道しかないわけです。それが燃え盛っているわけですから、もう前へ進むのを諦めなきゃしようがないんです。帰ってきて、しばらく様子を見ることになりました。

3日か4日たった頃に、広島市内の火が燃え尽きて収まったという情報が入ったんです。そしたら、おばが「お母さんを探しに行こう」って言って、私と8歳の姉を連れて出かけていったんです。

歩いてほんの5分も経たないうちに、3日か4日前にいとこのお兄さんが足止めをされたところまで行くと、たくさんの亡くなった方がその辺に散らばっているんです。さっきも言ったように、警報が鳴らなかったから、町中で歩いていた人、やけどをしても一生懸命郊外に逃れたら助けてもらえるかと思われて歩いて来られた方が、私たちの家の近くまで来て、力が尽きて亡くなられた人が、本当に数え切れないぐらいいらっしゃいました。

でも、市内で被爆した母親が、もしかしてこの辺まで逃げてきたんじゃないか思って、3人で一生懸命探したんですけど、そこに転がっているご遺体というのは、例外なくやけどをしていらっしゃるから、顔なんか1.5倍ぐらいに膨れているわけです。

もちろん4,000度の火の中で、着ているものは瞬間に燃えてしまいます。さっき作業している中学生の男の子たちの絵がありましたでしょう。あれ、腰から下、黒いズボンをはいているように描いてあるんですけど、本当はそういうものは全部燃えてなくなっているんです。それで、体の皮膚まで燃えて、みんなその辺にたくさん倒れていらっしゃるんです。一生懸命探したんですけど、当然見つかりませんでした。

諦めてまた家に帰って様子を見ることにしたんですけど、母は、家でそのときどうしていたかというと、ちょっと体の調子が悪かったもんで、少し遅めの朝御飯を食べていたそうです。そうしたら大きな音がして、家が普通の木造の建物ですから、ぺちゃんと潰れてしまって、家の下敷きになって体が全然動かなかったそうです。

でも、隣に住んでいたしっかりした奥さんがいらして、大きな声で私の母の名前を呼んでくださったんだそうです。体は動かないけど、声だけは出せたから「ここにいますよ」って返事をしたら、その方が母の住んでいた家の屋根を壊して、穴を開けて助けてくださったそうです。

やっと家の中から引きずり出してもらって、2人で逃げようって言っていたら、目の前に血だらけの女の人が立っておられて、私も連れて逃げてっておっしゃるんですけど、あんまりけががひどいから、近所の方なのにどなたか分からなかったそうです。どなたですかって名前を聞いて、初めて2軒先の家の奥さんだということが分かったらしいんで

す。3人で逃げることになったんですけど、私の母は田舎へ預けている私たちのことが心配で、田舎のほうへ向かって歩きたかったんですけど、火の勢いがすごくてそっちのほうには進めなかったらしいので、風の吹く反対のほうに逃げて、町の外れに比治山って小さい山を越えて、田んぼの中でしばらく休んでいたそうです。

母たちも3日か4日たって火が収まったというのを聞いて、私たちのほうへ歩いて来たんですけど、初めて会ったときに、真っ青な顔をしているんです。人間の顔の色でこんな青いのを見たことがないと思うほど、真っ青な顔をしていたんです。それでも、ちゃんと2本の足で立っていたからうれしくて、4日間待っている間に、もしかしたら母は死んでしまったかも分からないとか思っていましたので、もう生きて会えただけでうれしくて、顔の青いのはあんまり考えないことにしました。

それで、水を飲みたい人は川に行って、そういうふうに亡くなられたでしょう。どうして水を飲んだら死ぬか分かります？

【派遣生】安心しちゃうから。

【桒本】うん、それもあるかもしれないね。ほかにある、何か。

【派遣生】喉がやけどしている。

【桒本】そう、皮膚が全体、垂れ下がるほどやけどしているんだから、当然、熱い空気が鼻から入るんですから、ものを食べたら食道を通って胃に入る、この途中も全部焼けているわけです。だから、そこへ水が入ったら、それが刺激になる。

でも、水をあげたら「ああ、おいしい」言うて、みんな言われて亡くなるらしいんですけど、川の水を飲んだ人も、おいしいと思って、飲んだ瞬間に亡くなられたんだと思うんです。

それで、やけどをしても歩ける人は、鉄筋コンクリートでできた病院が市内に2軒か3軒かあって、そこまで行ったら治療してもらえるかと思って歩いて行っても、やけどをして皮膚が垂れ下がっているんだから、痛くて手を体につけることができないんです。だから、みんなお化けみたいに前へ手を出して、歩いて病院まで行かれたのです。

病院に行ったら治療してもらえると思われたのに、残っているのは外見だけなんです。鉄筋だから外は崩れずに残っていたんですが、治療に必要な薬とか包帯とか、それからベッドのような備品なんかも、全部燃えてなくなっているんです。せっかく病院にたどり着いても、焼け残ったコンクリートの床に寝かされているだけなんです。

原子爆弾が落ちた日に、1日だけで8万人の人が亡くなりました。そういう人たちのほとんどが道端へ転がっているわけよ。

8月6日って日本では一番暑い頃でしょう。だから、死んだ人が転がっていたらどういうことになるか想像がつくと思いますけど、広島中にハエが大発生しました。そのハエが飛んできて、病院で大けがをして休んでいる人にたかって、やけどをしている傷口に止まって、血をなめたりうみをなめたりして、

だんだんハエが増えていきます。

ハエの幼虫って、みんな知っている？　今の世の中が清潔だから知らないね。ウジ虫って、白いにょろにょろっとした虫をハエが産んで、その幼虫は生まれたときから人間の皮膚に食いついたまま、直接血液を餌にして、また成虫になる。だから、せっかく病院にたどり着いた人も、ハエにたかられて、傷があるだけでも痛くて苦しいのに、どんどん体力がなくなって、次々と人が亡くなられる。

その日のうちだけで 8 万人の人が亡くなられたんだけど、その後も次々亡くなられて、その年の 12 月までに 14 万人の人が亡くなられました。

広島の人は原子爆弾が落ちたなんて知らない。もちろん、日本中でそれを知っている人はほんの僅かだと思うんだけど、大学に行って物理を専門に勉強した人だけが、もしかしてあれかもしれないって想像ができたぐらいだろうと思います。だから、広島に住んでいる普通の市民は、みんな何にも分からないわけ。自分がどうしてこんなに苦しんで、どうして死ななきゃいけないのか、全然分からずに死んでいるの。

佐々木禎子さんという方が、あめの紙で折り鶴を折りながら亡くなられたってお話、御存じでしょう。今、平和公園にこうして鶴を支えて碑ができているけど、あの人は小さいときに被爆して、10 年たった頃に発病されました。だから、10 年たったときは、放射能が原因でこういう病気になったというのは分かってきたわけです。

だけど、そういうことが全然分からないうちに亡くなった人がたくさんいる。だから、自分がどうしてこんなに苦しまなきゃいけないのか、どうして死ななきゃいけないのか、何も分からないうちに次々人が亡くなられて、その年の暮れを過ぎても、お正月を過ぎても、どんどん人が亡くなられて、最終的には 20 万人以上の人が亡くなられました。

私の母は、青い顔していたと言ったけど、人間の背骨の中にある新しい血をつくる機能が、放射能で侵されて新しい血をつくることができないの。血ができなかったら人間の体はどうなると思う。生きていられないと思わない？

それで、私の母も私たちのところへ来てくれて、8 月 15 日戦争が終わった後、やっぱり食べるものがないから、自分がお嫁に来るときに持ってきた少しばかりの和服を 1 枚ずつ持っては、朝早く出かけて夕方遅くまであっちこっち歩き回って、僅かなお米と野菜に換えてもらえるように歩き回っていた。そうしたら、秋の初めに道で倒れて動けなくなりました。幸せなことに、そこにちょうど知り合いの人が通りかかられて、母親を別の親戚のところに運んでくださったの。

お母さん、お米を換えに行ったきり帰ってこないなと思って、心配しながら待っていたら、知り合いの人が私たちのところへ来られて、「あなたたちのお母さんはあした死ぬから、今日のうちに会っておきなさい」って言われるの。

ちょうど私と姉が母親に会いに行ったときには、かなり雨が降っていて、親戚の家へ入って母に会ったら、お母さんが一生懸命私たちに何か話そうと思うけど言葉にならない。どうしてかというと、洗面器に血の塊をひっきりなしに吐くからです。だから、さっきも言ったように血をつくる機能が侵されているんだから、古い血がどこかで体の中で塊になって外へ出てくるわけ。それを受けるのに一生懸命で、話もできない。

その日はかなり雨が降っていて、屋根がないから家の外も中も同じぐらい雨が降っていました。誰かが胸から上だけ傘を差してくださっているの。だから、胸から上は濡れなくて寝ている。胸から下は、体もお布団もびしょびしょ。そんな状態で寝ている。

そのときは、原子爆弾にやられたなんて知らないもんだから、母の周りにいる人も母親自身も、その病気は結核という病気だと思ったの。

結核って御存じ？　人の肺が侵されて、呼吸ができなくて。血の塊をどんどん吐いて、それが最期は呼吸器に詰まったりして死ぬ。だから、母親自身も周りの人も、もう死ぬ、もう死ぬと思っていたのよ。

でも、それは細菌のせいで起こるから、私たちみたいな小さい子供は移るからがあんまり長くそばにいちゃいけないのよね、すぐ別のところへ連れて行かれて、それっきりお母さんとは話もできないまま別れたの。それから、ずっと病状は悪くなるばかりだった。もう本当に駄目かと思っていたときに、父親が戦地から帰ってきた。

その頃になったら、単なるうわさだけど、ピカドンに遭った人は輸血がいいんだという噂が流れた。原爆って知らないもんだから、みんな、ぴかっと光ってどーんと家が潰れたから、ピカドン、ピカドン、言っていた。おばさんが大きくなって、3年生か4年生ぐらいになるまで、みんなピカドンって言っていました、原爆のことを。

ピカドンに遭った人は輸血がいいんだという噂が流れて、ちゃんとしたお医者さんが言われたわけじゃないんだろうと思うけど。幸いなことに私の両親は血液型が同じだった。父が戦地に行っていたわけだから、痩せ細って帰ってきたのに、毎日毎日輸血をしてくれたの。

それで、本当に少しずつ母が元気になってね。その頃は父親のお母さんが私たち姉妹の面倒を見てくれていました。おばあちゃんのうちの表で遊んでいたら、もう冬の初めだったと思うけど、寒くなっていたときに、自転車に2人乗りした人がこっちに手を振りながら来るわけ。何か私らに手を振っていない、みたいなことを言って8歳の姉とじっと見ていたら、そばに来たら、お母さんだった。

もう今日は死ぬ、明日は死ぬ、言われていたのに、父親が輸血をしてくれたおかげで少しずつよくなって、もう死んでいるぐらいの時間がたっているのに、私たちのところへ来たときにはうれしくてうれしくて。

でも、そのときもまだ真っ青な顔をしていました。本当に、初めて見たときからあんまり変わっていなかった。それでも4人で生活できることになって、とってもうれしくてね。それで、体は弱かったけど、よそのお母さんと同じように、家の中のお仕事はぼつぼつできるようだった。

でも、どういうわけか、足を柱でぶつけたらそこから内出血して、それが体のあちこちに出来て、何にもないのにできるわけよ。大

腿部なんか目立つところへできたら、最初は赤かったのに、紫になって黒くなってって、色がはっきり分かるほど変化していく。それがいつも体のどこかにあるわけ。

それでも何とか家の中の用事をしながら過ごしていたんだけど、しばらくして乳がんになって。みんな乳がんって知っているよね。おっぱいにがんができるんだけど、その月に病院でちゃんと手術してもらったんだけど、今後は肺がんになりました。

肺の中にがんができたら水が肺の中に溜まる。そしたら、空気が入るスペースがなくなるから、とても呼吸が苦しくなるの。もう苦しそうに肩で息していたけど、今度は首のリンパ腺に大きながんができて、すぐ脳にがんができて、とても苦しんで亡くなりました。

今だったら、病院に行っても設備がちゃんとできているから、息が苦しい人が病院に行ったら、酸素吸入して楽に息ができるようにしてくれるんだけど、そのときはそういう設備もなくて、本当に苦しんで亡くなりました。

今は、例えば誰かが胃にがんにできたとして、病院に行って手術したけど、切ってみたら肝臓にもがんが広がっていたという話。それを転移というの。原子爆弾に遭って放射能を浴びている人は、がんができても転移ではなくて、ほとんど同時に体のあちこちにがんができるの。

結局、母はそれで亡くなったんだけど、母はたまたまがんで亡くなったけど、白血病で亡くなる人もいるし、朝起きてみたら髪の毛が全部枕に抜けてくっついていて、何が起こったかというような人もいた。そういう人も、いろんなところへいろんなものができて、最後は亡くなられた。

世の中が少し落ち着いたときに、広島市内の学校も始まることになったの。また転校して、家も市内に住むようにして、市内の学校へ通うことになったのね。

もう１年ぐらいたっていたけど学校に行ってもまだ校舎がなかった。どうやって勉強していたかといったら、学校の周りの焼け跡から木の切れ端をみんなで拾って、その木を寄せ集めて、何かスタンドみたいなものを作って、それに紙を貼ってお勉強していた。

校舎がないんだから、雨が降ったらお勉強にならないでしょう。学校はお休みなの。梅雨時分になって、今日も明日もその次も雨が降るというようなときは、毎日学校へ行かないで家にいる。だから、小学校１年生になったときから、ノートも広げないうちに「帰りなさい」言うて走って帰る日が多くて、せっかく１年生になったのに自分の名前も書けないし、1 足す 2 が分からないような状態で。戦争が終わっても校舎がないからお勉強できませんでした。

だから、中学校に入ったときに「もうこの学年は漢字を知らない」言うて、いつも先生に怒られていました。でも、本を読みたくても本もない、本屋さんなんかない。今まであったものが全部燃えてなくなっているわけだから。だから、言い訳だけど、勉強のしようが

ないような状態だった。

小学校５年生ぐらいになったときに、やっと新しい校舎が建ちました。そのときに、県外に疎開していった人がたくさん帰ってきました。

５年生が、40 人のクラスが４つあった。だから５年生だけで 160 人いたわけ。40 人のうち 10 人、どのクラスも 10 人ずつ、お父さんもお母さんもいらっしゃらない子供だったの。そういう人たちは、新生学園という孤児院の施設でみんな一緒に暮らしていました。

私が５年生になる年だから、丸４年は経っているんだけど、その頃でもそんなに物が十分にあると思えなかった。その施設で生活しているお友達は、着るものも学用品も、鉛筆１本にしても周りの方からの寄附で生活していました。だから、冬に寒くなりかけているのに、まだ夏とあんまり変わらないような洋服を着ていらっしゃるというのが、すごく印象に残っているの。

そういう人たちは、中学校３年生までは私たちと一緒に勉強ができたんだけど、３年になったら、生活していた孤児院も出ていかなきゃいけないし、自分でどこかにお勤めして働かなきゃいけなかったの。だから、もう３年の卒業式ぐらいになったら、どこかの会社の面接を受けて働くところを決めて、卒業したら１人でお部屋を借りて、食事の支度なんかも全部して、働いてた。

でも、そのときは私もまだ子供だから、それがどんなに大変なことかよく分からなかったんだけど、だんだん大きくなったら、みんな大変だっただろうねと思います。そういう人たちが同じ５年生だけで 40 人もいらしたんだから、もちろんほかの学年もいらっしゃるわけだから、随分お父さんもお母さんもいらっしゃらない方が多かったわけです。

子供は、田舎へ疎開させてもらっていたけど、帰ってみたら家もなくなっているし、お母さんも亡くなられているし、お父さんは兵隊に行ったきり帰ってこないという方が、たくさんいらした。皆さんも、自分のこととして考えたら大変だと思われるでしょう。

私の母が最後まで生活していた家の隣に、女学校に行っているお姉さんがいらしたの。その人は、今もある広島駅の隣の郵便局に学徒動員でお勤めに行っていたの。郵便局の前まで行ったら、ちょうど８時 15 分に近かった。中から同じ仕事をしている方が出てきて、ドアを開けて２人でおはようございますってお辞儀したときに原爆が落ちた。ぽーんと飛ばされて、どのぐらい時間が経ったか分からないけど、その間、ずっと意識がなくて道路に転がっていたらしいの。

やっと気がついて起き上がってみたら、周りがもうもうと黒い煙が立っていたそうで、さっきご挨拶した人はどうされたかと思って、一生懸命探して歩いたらしい、かなり離れたところに両方の目が飛び出して、亡くなっておられたそう。

そのお姉さんは、体の半分に線引いたら、左側の顔も手も足も体も全部やけどをしていました。でも、その時は一生懸命歩いて、鉄筋コンクリートの病院までたどり着かれたそうです。でも、そのまんま２年ぐらい病院の床に寝かされていたまんまだったそうです。

何とか元気になられて、今の私みたいに、いろんな方にお話しする仕事をしていらしたんだけど、私もその人が本当に熱心に勧めてくださって、こういう仕事をすることになりました。初めは、いくら勧められても大勢の人の前で話をするという自信がなかったか

ら、いいお返事ができなかったの。

そしたらその方が、私のことを決心させるつもりだったんかどうか、自分のやけどをした手や足がどうなっているか見せてあげようかっておっしゃってくださったの。いくら親しいといっても、とても気の毒だから辞退したんだけど、あんまり熱心に勧めてくださるので、それに、生まれたときから隣同士で遠慮のない人だったから、見せてもらったの。

そうしたら、人間の脚の一番太いところ、大腿部があるでしょう、そこを見せてくださったときに、骨しかなかったの。やけどをしたときにろくな治療を受けられていないから、腐って肉やら筋肉が落ちたまんま。骨が残って、その骨の周りに、薄い後からできた皮が張りついているだけ。腕も肩までの間が骨しかなかった。人間って筋肉があるから歩けるの。だから、町に出てもろくに歩くことができなくて、5分も歩いたらすぐ手を挙げてタクシーを拾っていらっしゃいました。

その方は、顔もやけどしたまま、ちゃんと治療できていないから、皆さん、ケロイドという言葉、御存じかね。皮膚がガタガタなの。そのケロイドの皮膚にいつも吹き出物ができて、普通の人だったら、にきびができたって適当で終わりなんだけど、そのお姉さんはすぐ外科の病院に行かれる。

そしたら、それが皮膚がんなの。放射能を浴びているから、時間がたっても次から次に皮膚にがんができる。がんだから、手術するのに大きく周りまで取ってしまう。そうしたら、また顔に穴が開くわけ。それでも、病院で切ってもらった傷はだんだんと癒えてくるんだけど、最初のやけどの痕は最後まで変わらなかった。おできができたって病院に行かれるのを、私が知っているだけでも3回ぐらいあります。

14歳のときに郵便局で被爆されて、体中、傷だらけ。だから、最期まで結婚もしないで、ずっと私のような仕事をしていらっしゃいました。

でも、私の母と比べたら、ちょっと距離が遠いから長生きされたなと思うんだけど、70ちょっと過ぎまで生きておられたから。最期まで寝込むこともなくお仕事していらっしゃいました。だから、それはとても幸せだったと思います。

いろいろお話ししたけど、分かりにくいことがあったりしたら質問してください。

（質疑応答）

【荏原第五中学校　清水陽太】

桒本さんにとって平和って何だと思いますか。平和ってどういうことだと思いますか。

【桒本】

平和が一番よね。今、ソ連がウクライナを攻めて、両手にできるだけ荷物を下げて、赤ちゃんをだっこして避難している人のニュース、見ている？そうやって逃げていっても、逃げたところに赤ちゃんのミルクをつくる清潔なお水とかお湯があるかどうかというと、保障できないでしょう。もう本当に大変だと思います。

【冨士見台中学校　吉野輔】

原子爆弾が落ちて、生き残れた人がいると言っていたが、何で生き残れたと思いますか。

【桒本】

爆心地よね、掛け印のところ。近くの500メートル以内で生き残った人が、最初は4人だって聞いていた。そういう人たちはどうして助かったかというと、ビルの地下室のようなところにいたんだって。

それで、たった4人しか助からなかったのかと思っていたら、割と最近になって78人いらしたんだって。それはどういうところで助かったかといったら、大きい鉄筋の建物。元藝備銀行（広島銀行）の中とか、生命保険会社のビルの中とか。それも、同じビルの中でも、窓のところに椅子がある人は死ぬのよ。でも、ちょっとずれて壁になっているところにいた人は生きている。

だから、本当に紙一重で、78人の人がビルの中で生き残られて、その方たちも放射能を浴びていることは変わりないんだから、鉄筋に遮られた部分だけ、少し少なかったかも分からないけど。ずっとやっぱり普通の被爆した人と同じように、次々がんになったりして病気になりながら、その健康状態をずっと観察してこられたお医者様がおられて、つい1週間ぐらい前にその方のお話を聞かせてもらったんだけど、本当に運ですね。

『はだしのゲン』、御存じでしょう。あれなんか、学校の門柱の陰にいたから助かった。ちょっと先に歩いていた女の人は、目の前で死んでいるわけだからね。

だから、私たちもぎりぎりのところに預かってもらって命があったけど、本当にありがたいと思います。だから、こういうふうに皆さんにお話しできるのも自分の仕事かなと思って、頑張ってやろうと思っています。

【浜川中学校　廣田ゆら】

同じようなことを繰り返さないためには、どのようなことが大切だと思いますか。

【桒本】

皆さんにそういう質問を度々受けるんだけど、やっぱり政治がちゃんとしていないとできないよね、戦争のない国なんて。

それで、民主主義の世の中だったら何とか食い止められるかなと思う。でも、いろんな国に独裁者が出てきたら、何か変な状態になるでしょう。プーチンさんが変なことを始めたし、中国もどうなるか分からないし、北朝鮮もちょっとよく分からない。

だから、私たち日本は、今のとおり、みんなが話合いでいろんなことが決められる民主主義の世の中を大切にしてもらいたいと思います。だから、それは今の若い人にお願いします。

【東海中学校　齋藤捺希】

桒本さんが言っていたように、直接被爆した人が語り継いでいくということが今後難しくなっていく中で、今後私たちが伝えなきゃいけないときに、どんなことを主にみんなに伝えていけばいいですか。

【桒本】

何があっても、戦争するということは一番いけないことだと思う。やっぱり民主主義の世の中を保って、話合いで解決できるように努力したらいいんじゃないかと思う。

（代表生徒より感想）

【八潮学園　實川希衣】

本日はお忙しい中、貴重な話を私たちに聞かせてくださり、ありがとうございます。ネットや教科書などでは載っていないことについて詳しく知れました。

現在、戦後 80 年が経ち、話を伝える人も少なくなっている中で、私たちにできることは、友達や後輩にこの話を伝えることです。同じ出来事が二度と繰り返されないように、この話が忘れられないように、そして、この話を伝える人がどんどん増えるように、自分から積極的に動き、伝えられるように頑張りたいです。

本日はお忙しい中、本当にありがとうございました。

【生徒一同】ありがとうございました。
【桒本氏】ありがとうございます。

令和 7 年 8 月 5 日（火）
ANA クラウンプラザホテル広島内会議室

《被爆者講師プロフィール》
【氏名】桒本（くわもと）　勝子（かつこ）
【被爆時年齢】6 歳
【被爆時の状況】
戦況の悪化で広島市にも空襲が予想されるようになったため、親戚の家に疎開していた。
爆心地から 3.5km 離れた長束国民学校（疎開先の安佐郡長束村（現　広島市安佐南区長束））で被爆。窓際の子は粉砕されたガラスの破片で重傷を負った。3 日後の 8 月 9 日、行方不明の母を探しに広島市内に入り、数多くの遺体を見た。翌日、母は血の付いた浴衣一枚で、帰ってきた。戦争に行っていた父も復員して、ようやく家族が一緒に生活できるようになった。母は、50 歳を過ぎたころから、乳癌に続いて肺癌、脳腫瘍を患い、61 歳で亡くなった。私も、白血球減少症に悩まされている。

5. 成果報告

各中学校を代表して参加した15名の派遣生は、学んだこと、感じたことを各学校・地域に伝えるため、下記のとおり報告会や発表を行いました。

東海中学校　　齋藤　捺希

【日時・場所】令和７年　12月17日　体育館

【方法・対象】学習成果発表会　舞台の部

全校生徒・保護者　400名

【発表の内容】

・広島平和使節派遣で過ごした３日間について

・広島市長の言葉から受けた私の考え「核兵器の根絶と平和」を願う

・「一人一人の平和に違いがあるから現状世界で行われていることは矛盾だらけである」しかし、人を傷つけたり命を奪ったりすることは誰しもが望んではいない。武力で解決するのではなく、対話を積み重ねることが大切

・いま世界で軍備補強の動きが加速している

・過去の悲惨な歴史から得た教訓を無にすると同時にこれまで築き上げてきた平和構築のための枠組みを大きく外れてしまう

・語り継ぐことが大切＋今が戦前にならないように！

荏原第一中学校　　小林　環希

【日時・場所】令和８年　３月５日　体育館

【方法・対象】学習成果発表会

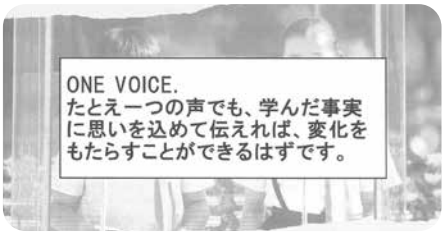
生徒約480名、保護者６名

【発表の内容】

広島平和派遣に行った際、桒本勝子さんの被爆者講話を聴いて当時の様子の凄惨さを感じた。道に誰かわからなくなるほど損傷した遺体が一面に倒れていたことのお話は、その状況を目の当たりにした人しか話せない言葉の重みを感じた。

平和祈念式典での子ども代表の言葉で「ONE VOICE」というのが、心に残っている。

自分が経験したことを自分の言葉で身の回りの人に伝えていき、それが広がっていくことをこれから願っていきたい。



戸越台中学校　　森岡　稔理

【日時・場所】令和７年　10 月 18 日　体育館

【方法・対象】学習成果発表会　全校生徒（282 人）・保護者・（約 150 人）

【発表の内容】事後報告会で発表した資料をさらに深め、広島派遣で学んだことやそこからさらに調べて気づいたことを探究的にまとめ、パワーポイントを使用して全校生徒・保護者に分かりやすく伝える。

第１章　　派遣の一員として

第２章　　派遣前後の気持ちの変化

経験・体験・語り部さんの話

・広島での生活（行動の様子など）

・被爆者の方（桒本さん）の話

・碑めぐり講話

第３章　　戦争の悲惨さ・平和とは

・1945 年８月６日何が起こったか

・核兵器について（リトル・ボーイなど）

・東京大空襲

第４章　　平和維持のためにできること・後世に受け継ぐもの

・平和に向けて（自分の考え、まとめ）

伊藤学園　　富樫　蓮月

【日時・場所】令和７年　10 月 24 日　アリーナ

【方法・対象】学芸発表会　児童生徒（5 ～ 9 年生）、保護者　約 600 人

【発表の内容】

① 広島使節派遣について

② 広島の印象・東京と変わらない近代化された街並みであり、原爆が落とされたことを想像することはできない。

③ 被爆者講話・様々な苦しみが折り重なって人々を悲惨な状況に追い込んだ
→広島は被爆地という印象が大きかったが、戦時中は常に苦しい思いをしていたことが分かり、印象深く受け止めた。

④ 平和への考え方・日々の生活は決して当たり前ではなく、常に感謝することが大切・平和な世界を創り上げるために事実を知り、関心を持ち続けることが大切

豊葉の杜学園　　岡住　ひなた

【日時・場所】令和７年　10 月 17 日　アリーナ

【方法・対象】学習成果発表会　生徒（5 ～ 9 年）およびその保護者　約 700 名

【発表の内容】

・被爆者講話や原爆関連施設を訪問して感じた平和への思い

・当時と現在の広島の様子およびその違い

・広島平和使節派遣に参加して学んだ平和実現に向けて自分自身ができる行動と児童・生徒に向けた平和実現に向けてのメッセージ

大崎中学校　　山本　裕斗

【日時・場所】令和７年　10 月 25 日　体育館

【方法・対象】学習発表会　全校生徒（221 人）、保護者（100 人）等

【発表の内容】

・原爆の被害について

・現在の核について

広島と長崎で起きた悲劇を二度と起こさないために、非核三原則を全世界で大切にすべき

・被爆者講話

・平和記念式典での話

平和という願いをもった人々が人種関係なく、同じ場所、同じ時間を共有するということは、とても意味のあること

・私が思う平和とは

日常を当たり前のように過ごせること。

・平和にするためにできること

過去の出来事、戦争や原爆について、知ること、理解を深め、考え続けていくこと

浜川中学校　　廣田　ゆら

【日時・場所】令和７年　12月６日　アリーナ

【方法・対象】報告会（市民科地区公開講座）
全校生徒、教職員、保護者、地域の方々
約400人

【発表の内容】

①問いかけ

・いつ広島に原爆が投下されたか

・10年先・20年先、それ以上先も語り継ぐことができるか

・いつも見ている景色が一瞬にして変わり果てること、大切な人がいなくなることを想像したことがあるか

②広島派遣について・参加の理由

③３日間の日程→考えたこと・印象に残ったこと

被爆者講話、平和記念式典、袋町小学校平和資料館、広島平和記念資料館、灯ろう流し、碑めぐり講話

④派遣を終えての感想

○最後に、いつか機会があったらではなく、ぜひ広島･長崎に行き自分の目で80年前にあったことを見て、聴いて、感じてほしいと伝えた。

荏原第五中学校　　清水　陽太

【日時・場所】令和７年　10月25日　荏原第五中学校

【方法・対象】文化祭
全校生徒、教職員、保護者　約500名

【発表の内容】

・聴いている人達が「平和とは何か」を考えさせるスピーチを行った。

・広島に原爆が落とされてから、今年でちょうど80年である。

・広島に投下された原爆によって、1945年12月末までに、約14万人が死亡、そして、約７万６千戸の建物が半壊以上という被害が出たほどに悲惨な出来事であった。

・被爆者の桒本勝子さんのお話の中で､平和とは｢毎日生きていられること｣だと言っていた。

・平和とは、「当たり前な日常が当たり前に過ぎていくこと」だと考える。

・今後も、この平和使節派遣で学んだ原爆の恐ろしさや、平和の尊さを伝える活動を行っていく。

日野学園　　秋山　優香

【日時・場所】令和７年　10 月 25 日　体育館

【方法・対象】文化祭　５～９年児童・生徒・保護者

【発表の内容】

①原爆について
　1945 年（今から 80 年前）の８月６日
　放射線による障害がその後も続く

②品川区の取り組み

③被爆者講話…桒本さん
　教科書や資料集とは違う「生」の原爆

④平和記念式典

⑤袋町小学校平和資料館
　コンクリートでできていて被爆しても原形をとどめていて多くの人が集まり、壁に伝言が書かれていた

⑥平和記念資料館
　たくさんの人の遺品の数々→本当の原爆の姿

⑦碑めぐり講話
　動員学徒慰霊碑…私たちと同じ年代の人が働いていた　等

荏原平塚学園　　佐原　菜那子

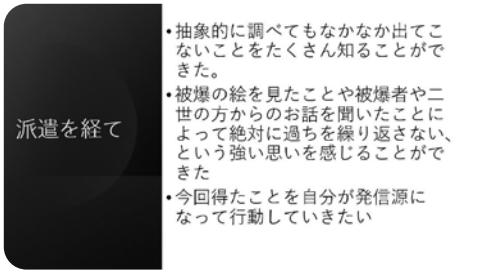
【日時・場所】令和７年　10 月 24 日　アリーナ

【方法・対象】学習成果発表会　５～９年生児童生徒、保護者、教職員　計 600 人

【発表の内容】

1. 派遣スケジュール
2. 志望動機、派遣前の考え
3. 被爆前後の原爆ドーム
4. 原爆の被害
5. 原爆の紙一重さ
6. 被爆者講話
7. 碑めぐり講話
8. 原爆は遠くの話ではない
9. 原爆は関係ない話ではない
10. 派遣を経て

上記の内容を 10 分程度で発表した。



鈴ヶ森中学校　　千葉　柑奈

【日時・場所】令和７年　10月25日　体育館

【方法・対象】学習成果発表会

全校生徒、保護者 約400名

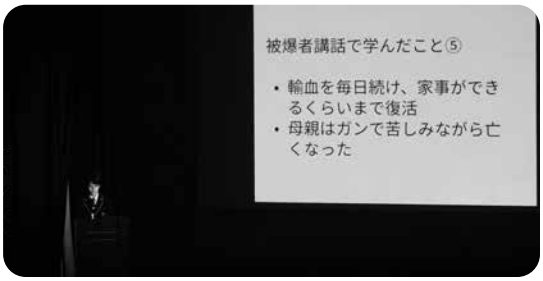
【発表の内容】

・スライド資料を映しながら活動について説明。

・特に講話について、うかがった内容（当事者の気持ち）や考えたことなどを伝えた。

・気持ちについて伝えられる資料等（ケロイドや救護所など）を提示。

・原爆について（怖さなど）や当時の様子（原爆投下時の気持ちなど）を伝えた。



冨士見台中学校　　吉野　輔

【日時・場所】令和７年　10月25日　体育館

【方法・対象】文化祭　全校生徒、保護者　約300名

【発表の内容】

・生徒に向けた質問

・原爆が落とされる前と後

・動画を使った発表

（原爆が爆発する瞬間に天井を見上げてもらいライトをつけて閃光を体験してもらう）

・平和記念公園の中にある建物の説明

・一番心に残った碑めぐり講話で聞いた平和の灯火について

・来年度参加する生徒に向けた言葉

荏原第六中学校　　長谷川　ゆから

【日時・場所】令和７年　10 月 25 日　体育館

【方法・対象】学習成果発表会　生徒全体（243 名）保護者（約 30 人）

【発表の内容】

○参加した理由について

○参加して感じたことについて

平和記念式典、原爆ドーム、平和記念公園

○ガイドの方の説明について

原爆死没者慰霊碑、平和の灯

○平和記念資料館について

・モノクロの写真でもわかる生々しさにぞっとした。

・原子爆弾が落ちる前後で、たくさんの人が生きていたことを改めて実感した。

○今後について

・今回の経験を多くの人に伝えたい。

・小さな助け合いを大切にしていきたい。

八潮学園　　實川　希衣

【日時・場所】令和７年　10 月 25 日　アリーナ

【方法・対象】学習成果発表会

5 ～ 9 年生児童生徒　約 500 名

【発表の内容】

○「平和とは何か」について

活動内容と印象に残ったこと

・被爆者の方のお話

・原爆ドーム見学

・平和記念式典参加

・資料館や記念館見学

・平和記念公園の石碑や鐘について

○「争いがなく、当たり前のことができること」が平和であり、それを作り上げるのは私たちである。

品川学園　　仲川　結

【日時・場所】令和７年　10月17日　アリーナ

【方法・対象】学習成果発表会

５～９年生徒　約600人

【発表の内容】

①被爆者講話から学んだこと

②広島で過ごした３日間について

１日目　平和記念公園

２日目　平和記念式典

３日目　碑めぐり講話

③これまでの私とこれからの私

第２部
青少年長崎平和使節派遣

●派遣生

若泉　遼　（高校生）　今村　凛音（高校生）
小竹　樂和（高校生）　石村　龍之介（中学生）
北川　愛子（中学生）　佐々木　桃香（中学生）

●引率者

荏原第五中学校教諭　山本　蓉
区長室総務課　平地　亜樹

（敬称略）

1．行動日程表

令和７年度　青少年長崎平和使節派遣　令和７年８月８日～10日（２泊３日）

８月８日（金）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
6：30	集合・出発式・羽田空港へ移動	ＪＲ大井町駅
8：15～10：05	航空機搭乗（羽田空港～長崎空港）	
12：00～12：45	昼食	長崎市内
14：00～17：30	青少年ピースフォーラム 「被爆体験講話」 「被爆建造物等のフィールドワーク」	平和会館ホール 平和公園周辺
19：00～19：50	ホテル着・夕食	ANAクラウンプラザホテル 長崎グラバーヒル
20：00	一日のまとめ	
22：00	就寝	

８月９日（土）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
7：10	集合・朝食	ANAクラウンプラザホテル 長崎グラバーヒル
10：45～11：45	平和祈念式典参列	平和公園
12：30～13：30	昼食	長崎市内
14：00～16：45	青少年ピースフォーラム 「平和学習（意見交換）」 「特別講演（マレーシア元首相 マハティール・モハマド氏）」	出島メッセ長崎
18：30～19：20	ホテル着・夕食	ANAクラウンプラザホテル 長崎グラバーヒル
19：30～20：30	一日のまとめ	
22：00	就寝	

8月10日（日）～11日（月）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
6：45	集合・朝食	ANAクラウンプラザホテル 長崎グラバーヒル
8：40～10：15	長崎原爆資料館・原爆死没者追悼平和 祈念館見学	
10：20～11：50	平和の案内人によるフィールドワーク	長崎大学医学部～山王神社
12：40～13：25	昼食	長崎市内
天候不良で航空機が欠航となったため、翌11日に帰京		
8月11日	航空機搭乗（長崎空港～羽田空港）	
	解散式・解散	羽田空港

「青少年ピースフォーラム」とは？

（主催：長崎市　運営：公益財団法人 長崎平和推進協会）

毎年８月９日の平和祈念式典にあわせて、全国の自治体が派遣する平和使節団の青少年と長崎の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的として実施しています。

このフォーラムでは、大学生や高校生などで構成される長崎市の「青少年ピースボランティア」が中心となり、進行やフィールドワークの案内などを行っています。

◎事前学習会・事後報告会（広島・長崎派遣合同で実施）

第１回事前学習会　６月30日（月）

派遣生が派遣の目的を理解し、より高い意識を持って、派遣に臨めるよう学習しました。

（1）派遣生自己紹介
（2）非核平和都市品川宣言事業について
（3）平和使節派遣事業について
（4）事前学習
（5）派遣日程や生活面・健康管理について
（6）次回までの課題について

第２回事前学習会　８月１日（金）

区長・教育長を表敬訪問し、派遣に向けての決意表明をしました。また、各グループが１回目の事前学習会で決めたテーマについてグループで発表・意見交換を行い、各グループでまとめ、全体へ発表しました。

（1）区長・教育長　表敬
（2）グループ学習
　各グループで、関心のある学習テーマを決め、それぞれが自己学習を行い、グループごとに共有
（3）「派遣のしおり」内容確認
（4）派遣の諸注意事項について

事後報告会　８月29日（金）

各グループで派遣中に感じたこと、学んだことを区長・教育長、学校関係者、保護者に向けて発表しました。

（1）被爆２世による講話
（2）発表準備
（3）派遣の成果発表

2. 長崎での主な活動

(1) 被爆体験講話

〈日　時〉8月8日（金）14：00～15：15
〈場　所〉平和会館ホール
〈内　容〉青少年ピースボランティアの進行により開会行事が行われ、その後、被爆体験者である三瀬清一朗さんによる被爆体験講話が行われました。

●被爆者講話　三瀬（みせ）　清一朗（せいいちろう）さん

被爆体験講話の様子

国民学校5年生の（10歳）の時、爆心地から3.6㎞の屋内で被爆。家族8名は無事だったが、家の中は惨憺たる有様、後片付けに追われた。数日後、学校が気になり様子を見に行くと、想像を絶する現場。瀕死の人、大火傷でリヤカーで運ばれてくる人、「水を、水を」と叫び、苦しさのあまり「殺してくれ、殺してくれ」の声。救護が間に合わず、次々と亡くなり、校庭で焼かれる様を嫌というほど見せられた。

〈参加しての感想〉

〈北川〉
私は被爆体験講話を聴いて、夏明けのあいさつが「よう生きとったな」「助かったな」などだったという言葉が印象に残っています。「どんどん被爆者が減っているため、若者がこうして原爆に興味を持ってくれるのはとてもうれしい」と聞いて私たちがこれから核をなくすための活動を受けついでいかないといけないんだと実感しました。

〈今村〉
「平和は人類共通の世界遺産である」だとか、「平和というのはあたり前の生活ができること」というお話があり、「平和とは何なのか」という問いに対する自らの考えにヒントをもらえた。命からがら原爆の被害を避け、自身で命を守りぬいた彼が語る「命の尊さ」は重みがあった。

〈小竹〉
「悲しい2学期の始まり」という言葉がずっと頭に残っている。うれしいはずの級友との再会の日が悲しく悔しい日となってしまったと聞き、改めて戦争の悲惨さを感じた。こう感じられたのは、現地で三瀬さんのお話を直接聞けたからだと思う。

（2）被爆建造物等のフィールドワーク

〈日　時〉8月8日（金）15：25～17：30
〈場　所〉原爆資料館周辺（平和公園コース）
〈内　容〉爆心地公園や平和公園などを青少年ピースボランティアと一緒に見学し、被爆の実相を学習しました。

浦上天主堂の遺壁

長崎の鐘

平和祈念像

平和の泉

〈参加しての感想〉

〈若泉〉
下の川を見ている際に、被爆者が水を飲んだ後、安堵感で亡くなられたと聞いて驚きました。散々空爆に見舞われた被爆者が安堵感で死んでしまうほど、原爆は人間の想像を遥かに絶したものであることがわかります。

〈石村〉
浦上天主堂の遺壁では、原爆の爆風で建物が動いたと聞いて驚きました。建物は分厚いレンガでできており、とても頑丈だったからです。

（3）平和祈念式典

＜日　時＞　8月9日（土）10：45～11：45
＜場　所＞　平和公園内平和祈念像前広場
＜内　容＞　被爆80周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列し、原爆が投下された11時2分には、一斉に黙とうを捧げました。

平和の泉で千羽鶴を捧げる

〈参加しての感想〉

〈石村〉
特に印象に残ったのは長崎市長の「長崎平和宣言」です。「地球市民」「長崎を最後の被爆地にする」その言葉に世界平和と非核に対するとても強い意思を感じました。水を求めながら亡くなっていった方々を想い、「献水」をして祈っていたのが印象に残っています。

〈佐々木〉
地元の子が歌っていた「千羽鶴」という歌が印象に残っている。この曲は長崎市出身の方が全国から送られてきた歌詞の中から選ばれ、作詞した曲だそうだ。最後の「未来への希望と夢を虹色の鶴に折る」の部分が各地からよせられている千羽鶴と重なり、感動した。

〈小竹〉
祈念式典が始まるまでは土砂ぶりだった雨が、始まったとたんに止んで晴れたことを憶えている。長崎市長のスピーチで「地球市民」という言葉を初めて耳にした。
「地球市民」という言葉で、日本だけでなく世界全体で核を廃絶し、地球を守らなければいけないという強い意志を感じた。

（4）平和学習（意見交換会）

＜日　時＞　8月9日（土）14：00～16：00
＜場　所＞　出島メッセ長崎
＜内　容＞　12名程度のグループに分かれ（ピースボランティア2名、自治体派遣生10名程度）テーマに沿って意見交換を行いました。
【テーマ】「違うってどんなこと？違うって悪いの？」

グループワークの様子

〈参加しての感想〉

〈佐々木〉
全国から来ている中・高生と共にどのような違いがあるのか、どうしても分かり合えない時はどうすれば良いのかを考えた。その中で、違いには見えるものと見えないものがあり、すぐには直せないものばかりだと気づいた。分かり合えなかった時、武力に頼らずに解決するにはお互い自分の事について話し、認め合うことが大切だという結論を私の中で出した。

〈北川〉
人と人のちがいやそれによっておこる良いことと悪いことについて話し合いました。容姿にちがいがあるおかげで個人の見分けがつくだとか、考え方がちがうことによって新しい考えを知ることができて楽しいけれど、そのせいで下手したら戦争になってしまう…などです。それらを話し合って出た結論は「互いのちがいを認め合い受け入れることが大切！」となりました。

（5）長崎原爆資料館・原爆死没者追悼平和祈念館　見学

＜日　時＞　8月10日（日）8：40～10：15
＜場　所＞　長崎原爆資料館・原爆死没者追悼平和祈念館
＜内　容＞　被爆資料や被爆の惨状を示す写真などの展示物を見学し、「戦争に至るまでの経緯」や「当時の被害状況」などを学ぶことで、派遣生一人ひとりが戦争の悲惨さを感じ取り、平和に対する意識を改めて強く持ちました。

長崎原爆資料館

原爆死没者追悼平和祈念館

〈参加しての感想〉

〈石村〉
広島や長崎だけでなく、原爆投下の候補地はたくさんあったと知りました。その中には私たちが住む近くの街もあり、東京湾、川崎、横浜なども候補に含まれていたということに驚きました。また原爆の熱で溶けて変形したラムネ瓶を触ったり、11時2分ちょうどで止まっている時計がありました。生活に身近な被爆した物を見るとさらに悲惨さが伝わってきてとても怖かったです。

〈佐々木〉
原爆資料館で胸を打たれた事は被爆者の証言だ。特に「おそろしい烙印」という証言が目に留まった。これは原爆が投下された後も被爆者というレッテルが貼られ苦しめられた事が記されている。原爆には身体的な被害だけでなく精神的な被害もたくさんあったことが分かった。

（6）平和の案内人による碑めぐり

＜日　時＞　8月10日（日）10：20～11：50
＜場　所＞　長崎大学医学部～山王神社
＜内　容＞　長崎平和推進協会所属の平和案内人に長崎大学医学部～山王神社のコースをガイドしてもらいながら見学しました。

●平和の案内人　岩本（いわもと）　孝雄（たかお）さん

昔の地図を見る様子

長崎大学医学部にある献花台

ふりそでの少女

被爆クスノキ

〈参加しての感想〉

〈今村〉
山がちな長崎は原爆の被害が広がりやすかったと言われ、それによって救助が遅くなったりもしたそうだ。山の向こう側では何が起こっているかがわからず、医者の派遣が遅れたうえ、避難する人も登りきれず亡くなっていったという地獄図のような状況を聞きとても心が痛かった。

〈若泉〉
最初に昔の長崎の地図を見て、各家の名前が記録されているのに驚きました。また、家が吹き飛んでも残った木材で家を建て直した人やクスノキを依り代として復興に励んだ人達の存在を知り勇気をもらった気分になりました。それと同時に、第一鳥居が撤去され、大きな道路が作られたなどの時代の流れを知り悲しくなりました。

3. 感想文

Peace: a world heritage to be shared by all humanity

カナディアンインターナショナルスクール
若泉　遼

私は「平和」にこれが正解だという答えは無いと思います。誰もが平和を望んでいるけれど、それぞれが思い描く平和の形は少しずつ違っていて、その小さなずれが、争いにつながってしまうのではないでしょうか。だとしたら、互いの考え方の違いを認め、尊重しあうことが、平和な社会へ向かう一番の近道ではないでしょうか。少なくとも、今回の長崎派遣で私はこのような結論に至りました。

被爆体験講話で講師の三瀬清一朗さんがおっしゃった「平和は人類共通の世界遺産です」という言葉が、この感想文のタイトルです。平和を世界遺産に例えるのは、とても分かりやすいと思います。それは地球市民全てのものであると同時に、みんなで力を合わせて守っていくべきものだ、というメッセージが込められていると感じました。平和とは何かという具体的な答えを三瀬さんが述べられなかったのも強く印象に残っています。一人ひとりに自分なりの平和の理想があるからこそ、三瀬さん自身の考えを私たちに押し付けたくなかったのではないかと私は感じました。一方で講話の最後に三瀬さんは、平和はコミュニケーションによって得られるとおっしゃいました。私は様々な国から来た生徒達と交流できる特別な環境にいるため、この講話をきっかけに、学友との対話をこれまで以上に大切にしていきたいです。

三瀬さんのお話が私自身の平和に対する考え方を見つめ直す機会になった一方で、マレーシアの元首相であるマハティール・モハマド氏の特別公演は社会全体が平和を求めるあり方を見つめ直す機会となりました。マレーシアから見た現在の社会には多くの疑問がよぎる一方、元首相らしい説得力も感じました。

モハマド氏はロシア・ウクライナ戦争は昔の NATO とワルシャワ条約機構という対立構造の延長線上にあるものであり、現代にこうした派閥は似合わないと指摘しました。言われてみれば、ロシアも自国の安定のために戦っているのだから、「ロシアによるウクライナ戦争」というニュースの報道の言い回しにも引っかかります。ニュースの偏見報道やアメリカと日本がロシアに経済制裁を下したという事実は、知らず知らずのうちに私にロシアは悪者だという印象を植え付けていたのかもしれません。

モハマド氏は世界で続く長期の戦争を、ASEAN（東南アジア諸国連合）の現状と比較していました。ASEAN は結成から 60 年間、戦争を起こしていません。また、タイとカンボジアの戦争もすぐに終結することができました。これは ASEAN の国々が毎年コミュニケーションを取れる場を設け、対立が大きな衝突に進展する前に、お互いに納得できる結論を出してきた結果かもしれません。世界中で続く争いを止めるには、特定の国に味方しない中立国が対話の場を設けることが不可欠であると私は感じました。

今回の長崎派遣を通じて、私は平和な世界を守っていくためには、お互いを見つめ直し理解し合える対話が最も重要であると改めて認識しました。そして、その対話を実現するためには、中立の立場を取る国の存在が大切です。私はそれが先進国、特に原爆が唯一落とされた国である日本の使命ではないかと信じています。

「吾日に吾が身を三省す」という言葉のよ

うに、自分を省みながら、相手を尊重する心を大切にして、私なりに平和を守り続けていきたいです。

平和は学ぶだけでは見えない

成城学園高等学校　１年　小竹　樂和

私は祈念式典の雰囲気を肌で感じてみたかった。

式典の規模、首相や市長のスピーチが自分の心にどう響くのか、生で体験してみたかったのだ。実際に現地で式典に参加してまず感じたのは、自分がいかに「何も知らなかったか」ということだった。私は歴史が好きで、戦争や原爆についても人より知っているつもりでいた。だが、それはただの表面的な知識でしかなかったと気づかされた。

長崎に着いて最初に聞いたのは、被爆者・三瀬清一朗さんによる講話だった。三瀬さんが10歳のとき、８月９日に体験した出来事は、私の想像をはるかに超えていた。原爆の光を遮ったオルガンのおかげで命をとりとめたこと。久しぶりに再会した旧友と交わした第一声が「よく生きていたね」だったこと。学校の校庭が火葬場になっていたこと。そして、再開された授業で校庭の整備を命じられ、拾い上げたものが人の指の骨だったということ。ただ話を聞いているだけで胸が締めつけられた。もし自分が同じ年齢でその体験をしたら、きっと恐ろしくて泣くことしかできなかっただろう。淡々と語る三瀬さんの声が、逆にその悲惨さを際立たせていた。私はそのとき初めて、「自分は本当に何も分かっていなかった」と気づいたのだ。

そして迎えた８月９日、平和祈念式典。私は、亡くなった方々を悼み、過去を思い出すための場だと思っていた。けれど、実際の式典はもっと未来に向けたものだった。

被爆者や長崎市長は、「地球市民」という言葉を用いて、どうすれば平和を守っていけるのかを語っていた。原爆で家族を失った人々が、過去だけに囚われるのではなく、未来のために声を上げていた。長崎の人々は、すでに一歩も二歩も前に進んでいたのだ。平和を守るということは、ただ過去を学ぶことではない。そこから何を感じ、どう未来に活かしていくかが大切なのだ。

私は、長崎の原爆について「知っているつもり」だった。しかし、知識として頭に入っていても、それは本当の意味で「知っている」ことではなかった。本当に知るとは、相手の気持ちを想像し、自分の心でその痛みを感じることだ。そのためには、人の声に耳を傾け、自分の目で見て、心で受け止めなければならない。知識だけでは足りない。人と関わり、心を動かされ、はじめて自分のこととして考えることができるのだ。

これから私は、「見て、聞いて、感じる」ことを大切にしていきたい。平和について、自分の言葉で語れる人になりたいと思った。

『違いを“認め合う”ことから始まる平和への一歩』

豊葉の杜学園　７年　北川　愛子

長崎に行く前の私は、「平和って何？」と子どもや友人に聞かれても、うまく答えることができず、言葉に詰まってしまっていたと思います。そもそも、平和という言葉は知っていても、それが自分にとってどんな意味を持つのか、深く考えたことがなかったからです。

では皆さんは、「平和って何？」と聞かれたら、なんと答えるでしょうか。

長崎に行かせてもらったことで、私の中でその答えが少しずつ見えてきました。私が気づいた平和とは、「当たり前の生活をみんなが当たり前に過ごせること」だと思います。安心して学校に通い、家族と笑い合い、未来を自由に描けること。それが当たり前にできる世界こそが平和な社会だと感じました。

しかし、被爆体験講話を聞いたとき、私は「核兵器が存在しない世界こそ平和だ」と強く思いました。そのとき初めて、平和とは一つの答えではなく、人や立場、経験によって様々な形があるのだと気づきました。私自身の中でも、平和の意味が変化していったように、きっと他の人にも、それぞれ違った「平和とは何か」の答えがあるのだと思います。

ピースフォーラムの活動では、私たちの班でそうした「考え方の違いや価値観の違いを認め合い、受け入れることが平和につながるのではないか」と話し合いをしました。例えば、容姿に違いがあることで差別の原因になることもありますが、その一方で、それがその人の個性として表れたり、ひとりひとりに違いがあるからこそ人間社会が豊かになったりするという良い面もあります。

私はこれまで「違い」という言葉にどこか悪いイメージを持っていました。でも実際は「違い＝悪い」ことではなく、見方を変えればその違いが新たな価値を生むこともあると気づきました。だからこそ、違いの中にある「良さ」にも目を向けることが大切だと思います。

そして、もしみんながそう思えるようになれば、お互いを尊重し合える社会が実現し、当たり前の生活をみんなが当たり前に送れるようになると信じています。

これから私は、自分と違う考えや価値観を持つ人とも向き合い、対話を通してお互いを理解しようと努力していきたいです。それがたとえ小さな一歩でも、平和な社会をつくるための大切な一歩になるよう頑張りたいです。

「派遣を通して見つけた間違えと答え」

頌栄女子学院高等学校　１年　今村　凛音

私がこの派遣に参加したのは、80 年前の 8 月 9 日に何が起こったのか詳しく知るとともに、平和とは何かという問いに対する自分なりの答えを見つけたいと思ったからだ。当時のことを知りもせず、平和とは何かもわからないまま、平和事業に参加していた自分に矛盾を覚えたのだ。

特に印象に残ったのは、ピースフォーラムでしたディスカッションと被爆者講話の拝聴をした経験だ。これらの活動により「『平和とは何か』に対して自分なりの答えを見つける」という目標にむけて、大きく前進できた。ピースフォーラムでは、人々の違いについて考えることによって何が差別を生むのか、どうすれば差別はなくなるのかを考えた。私が参加した班は、「小さな違いが争いにつながる、逆に理解しあえれば平和につながる」という結論を導いた。当たり前に聞こえるが、世界の紛争は全て、小さなすれ違いの積み重ねによって起こっていること、平和が“相互理解・尊重”によって成り立っていることに気が付かされた。また、被爆者講話では平和のためにはコミュニケーションが欠かせないとたびたび強調された。講師を務めた三瀬清一朗さんは、「今の当たり前の生活を送れることこそが平和」と語るとともに、“当たり前”は人によって違うとも語る。当たり前の生活が送れることが本当に平和といえるのか、そもそも ” 当たり前 ” とは何なのか、そんなことを考えさせられる貴重な経験だった。このような活動を通して、私は「平和とは、『公衆衛生が整っていて衣食住に困らない、そんな当たり前の生活が送れるとともに、互いを

尊重しあえる心の余裕を持てる社会』のことだ」という”私なりの答え”を導いた。

最後に一番印象に残った言葉をここに記したい。被爆者の「アメリカを恨みはしない」という言葉だ。原爆を投下した国であるアメリカを憎まない気持ちが私には理解できなかった。だが、「食糧不足であった当時に、食べ物を分け与えてくれたアメリカには恩がある」という言葉を聞き、自分があまりにも狭い視点で戦争や原爆をとらえていたことに気が付いた。また、マレーシアのマハティール元首相の講演会では、日本が東南アジアで行った侵略についてのお話があった。このようなことから、日本が今争いのない生活を送れているのは、過去に赦されまた赦してきたからなのだと理解した。

この派遣を通して、知識不足であったが故に日本は単なる太平洋戦争の被害者であると勘違いをし、アメリカに償いを求めていた自分に気が付き反省した。被爆の経験を伝え次ぐのはもちろんだが、より多くの視点から歴史を学び、どのようにすれば世界平和を導けるのかを一番に考えるべきだと強く感じる。このような派遣に参加した身として、責任をもってこのような問題解決に積極的に携わっていきたいと、決意を新たにすることができる貴重な経験だった。

平和使節派遣に参加して

荏原平塚学園　７年　石村　龍之介

僕は長崎平和使節派遣に参加して、原爆の悲惨さと平和について学びました。学校で習ってはいましたが、本当は少し実感がありませんでした。講師の三瀬さんは 90 歳で 10 歳の時、被爆されました。「ピカ」「ドーン」といったオノマトペのあるお話は授業では感じられない悲惨さがあり、直接体験を聞くことができてとても貴重でした。通っていた学校が救護所となり、男女の区別もつかないほど血だらけの人が次々と運ばれてきて「殺してくれ！」と叫ぶ人、水を求めてうなされる人、異臭とうめき声で学校はまさに「地獄」…。勝っても敗けても戦争が終わって「うれしかった」と。子供がそんな風に思う戦争は二度としてはいけないと強く思いました。平和祈念式典では、長崎市長の「地球市民」「長崎を最後の被爆地にする」という言葉に、世界平和や非核への強い意志を感じました。水を求めて亡くなった方々への「献水」の祈りも印象的でした。ピースフォーラムでは全国の同年代の人たちと平和について話し合いました。意見が違っても、まずは相手の話を聞くことが大切。こうした基本的なことが平和につながると思いました。マレーシア元首相による、国連の拒否権についての講話もすごく興味深かったです。原爆資料館では、3,000 度の爆風で変形したラムネの瓶に触れたり、11 時 2 分で止まった時計や生活に身近な被爆した物を見ると、惨状がリアルに伝わってきて怖かったです。長崎出身の福山雅治さんの歌のモデルになった「被爆クスノキ」は、想像より小さかったですが、焼けても原爆に負けずに芽を出し、前に進む力を人々に与えたと聞き、とても感動しました。長崎の皆さんの「希望の木」ですので、これからも元気に生き続けてほしいです。三瀬さんは「平和という名の花の種を、皆さんに預けるので満開になるよう育ててください」と語られました。「平和の種」を預かった僕たちにできることは何か？それは、平和の種を「分けること」だと思い

ます。家族や友達、周りの人に長崎で感じた悲惨さや、平和の大切さを伝えること。それが僕にできる第一歩です。今回の派遣で、戦争や核の恐ろしさだけでなく、長崎の方々が絶望から立ち上がり、世界平和を強く願うようになったことも学びました。また、自分の行動を変えるきっかけにもなったと思います。毎日、当たり前のように学校に通えることに感謝し、普通の生活を大切にしていきたいです。「平和とは何か？」「自分に何ができるか？」を考える貴重な時間でした。この経験はずっと僕の心に残ると思います。参加できて本当に良かったです。ありがとうございました。

対話～相互理解を深めるために～

小石川中等教育学校　２年　佐々木　桃香

「平和とは、人類共通の世界遺産であり、当たり前の生活ができることである。」これは、被爆者の方が私たちに向けて言ったメッセージである。その平和を実現するべく、今回の長崎派遣では多くのことを学んだ。

私は、被爆者講話で聞いた話が鮮明に記憶に残っている。空腹で母のところへ行くと、「静かに寝ときなさい」と言われ、二学期にはなると亡くなっている友達もいたそうだ。今は美味しいご飯があって楽しい仲間がいる。けれどもその日常が一瞬にして消えてしまったと思うと恐怖でいっぱいだ。被爆者本人によると、終戦時、本人はつらくて苦しい戦争が終わったことに喜んでいたものの、家族は日本が負けた事実を許せなかったそうで、家族内でもすれ違いが起こっていたそうだ。長い戦争による物資不足と素直な感情さえ表せない不自由な環境は想像もしたくないほど苦しいものだったと思う。そんな中、次の世代がこのような思いをしなくていいように伝えてくださっていることに感謝しかない。私はここで被爆者の方が渡してくださった平和へのバトンをつなぎたい。そして、当時の状況をより詳細に伝えたいと感じた。

そこで、出会ったのがピースフォーラムの方の活動だ。ピースフォーラムとは、長崎の青少年が被爆の実相を教え、私たちとともに平和について考える団体である。その中で、高校生から大学生といった、私とあまり年が離れていない人が戦争について解説していることに驚いた。途中のフィールドワークで世界各国から送られてきたモニュメントを見ている時どこの国から送られてきたのだろう、と思い質問してみた。すると、私の二個上である高校一年生が流暢に答えてくれた。その時、私は二年後にこのように戦争についての知識をここまで蓄えられているだろうかと考えた。長崎では小学校一年生から平和学習が行われていることを知り、日頃から平和への意識が高まっていることを実感した。一方で、私たちの地元で起きた東京大空襲でたくさんの犠牲者が出たにもかかわらず、興味を持つきっかけが少ないと感じている。私自身、ピースフォーラムの方のように、積極的にかかわっていく姿勢を大切にしたいと思う。そして、ピースフォーラムのような活動を品川でも増やしたいと考えた。

このように、長崎派遣を通して被爆者の切実な声、現地の方の積極的な姿勢をはじめとした新しい視点をたくさん学んだ。これを受けて、これから私は様々な人とコミュニケーションをとっていこうと思う。長崎では、そこで出会った年齢も出身も異なる人と対話をすることで文化や価値観の差に気づくことが出来た。視野を広げることで、今後問題に直面した時、武力以外の選択肢を増やすことができる。学校の友達や近所の人などまずは身近なところから、そして言語や文化が違う人など交流の輪を広げて、平和について考えるきっかけを提示したいと考えた。そして、武力による戦争が無い平和な世界を作るために行動できる人になりたいと思った。

4. 派遣をふり返って

平和使節派遣に参加しての感想

〈小竹〉
　自分が考えていたより、深く自身の考えを探究して考えの幅を広げられた。戦争や原爆に対する考えもとても深まったと思う。被爆者の方が原爆投下を客観視していたこと、同世代の人がピースボランティアとして活動していたこと、祈念式典に参列していろんな人の言葉を聞いたことなどすべてがきっかけとなって自分の考えを作ることができた。

〈若泉〉
　様々な人と交流して、また意見をぶつけ合える同世代の人達がいる環境が幸せでした。いろんな角度で、原爆について、平和についてより深く学べたと感じました。

〈佐々木〉
　3日間、平和に関する活動をしてきたので平和意識は高まりました。現地の方やピースフォーラムの方に影響されて、私も平和を実現するための一歩を踏み出したいと感じることが多くなりました。

参加以前、以後で変わった考えなどはありますか？

〈佐々木〉
　私は元々、平和について知りたいという動機の他に、たくさんの人とコミュニケーションをとりたいという目的もありました。その中で、今回の派遣を通して、コミュニケーションをとることは簡単ではないと思い知らされました。しかし、それでも人とコミュニケーションをとることは楽しいことだと考えました。確かに話すということは難しいけれど、被爆者の方が言っていたように、武力に頼らず解決するための手段として大切にしていきたいです。

〈北川〉
　今までの私は「平和って何？」と聞かれたとき、すごく考えこんでしまうし、聞かれるたびに内容が変わってしまうブレブレで芯のない答えになってしまっていました。しかし、全国からあつまる派遣生たちと関わって色々な意見をきいたなかで私が思う平和は「あたりまえの生活をみんなができること」です。しかしそもそもあたりまえとはなんだろう？など、まだまだこの平和について突きつめていくことが沢山あるので、これからも私の平和を突きつめていきたいです。

今回の派遣を経験し、これから伝えていきたいことはなんですか？

〈今村〉

今まで日本が受けた被害にしか目が向いておらず、無意識だが世界平和とは反対の方向に思考が走っていたこともあると思う。これを参考に、被爆者の体験や痛みを伝えることはもちろんだが、日本が犯してきた罪や当時差しのべてもらった救いの手、これらをふまえてどう世界平和を実現していくかを一方的に話して理解するのではなく、皆と一緒に考えるスタンスで伝承していきたい。

〈小竹〉

もっと自分の周りのことに関心をもつこと。自分の知らないことはそこら中にあるし、それを一つでも知ったら相手や周りをもっと理解できるかもしれない。それは、原爆や東京大空襲のことにも通じる話だし、「平和」をつくるうえでも重要なことだと思う。だから、私は周りのことに興味関心をもって色んな人と対話をしていろいろな考えを知ることが大切だと伝えたい。

〈石村〉

当たり前の生活こそが「平和」。「平和」が一番大切。この幸せな生活があたり前ではないということと、自分が長崎で聞いたこと、見たこと、戦争のおそろしさを周りに人に伝えていきたいと思います。

これから自分たちにできることはなんですか？

〈北川〉

体験講話の際に、被爆者の高齢化が進んでいるから若い人たちが積極的に平和について調べたり考えたり活動をしてくれるのはとても頼もしいとおっしゃっていて、確かにこれからは私たちが被爆した国の国民としても、地球市民としても平和について考えることはとても大切だと思いました。私や友人、自分たちにできることはまず戦争について知ることだと思います。派遣に行く前、原爆について調べた時、知らないことがとてもたくさんあって私は今まで原爆についてまともに調べてこなかったんだなと思いました。このように、「戦争」について視野を広げたらまだまだ知らないことがたくさんあると思うので調べて知っていきたいです。

〈石村〉

私にできることは限られていると思いますが、自分や周りの人の命を大切にして生きることと、自分や他人を傷つけないように心がけて、毎日普通の生活を幸せだと思って感謝して生きることです。

第３部　資料編

被爆80周年

Commemorating 80 years since the atomic bombing

広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式

HIROSHIMA PEACE MEMORIAL CEREMONY

令和７年(2025年)８月６日

August 6, 2025

広　島　市

The City of Hiroshima

式 次 第

Program

開　　式	8：00	**Opening**
原爆死没者名簿奉納 広島市長 遺族代表	8：00	**Dedication of the Register of the Names of the Fallen Atomic Bomb Victims** Mayor of Hiroshima Representatives of the bereaved families
式　　辞 広島市議会議長	8：03	**Address** Chairperson of the Hiroshima City Council
献　　花 広島市長 広島市議会議長 遺族代表・こども代表 被爆者代表 来　賓	8：08	**Dedication of Flowers** Mayor of Hiroshima Chairperson of the Hiroshima City Council Representatives of the bereaved families and children Representatives of the atomic bomb survivors Distinguished guests
黙とう・平和の鐘	8：15	**Silent Prayer and Peace Bell**
平和宣言 広島市長	8：16	**Peace Declaration** Mayor of Hiroshima
放　　鳩		**Release of Doves**
平和への誓い こども代表	8：24	**Commitment to Peace** Children's representatives
あいさつ 内閣総理大臣 広島県知事 国際連合事務総長	8：29	**Addresses** Prime Minister of Japan Governor of Hiroshima Secretary General of the United Nations
ひろしま平和の歌（合唱）	8：46	**Hiroshima Peace Song (chorus)**
閉　　式	8：50	**Closing**

平　和　宣　言

今から80年前、男女の区別もつかぬ遺体であふれかえっていたこの広島の街で、体中にガラスの破片が突き刺さる傷を負いながらも、自らの手により父を荼毘に付した被爆者がいました。「死んでもいいから水を飲ませて下さい！」と声を振り絞る少女に水をあげなかったことを悔やみ、核兵器廃絶を叫び続けることが原爆犠牲者へのせめてもの償いだと自分に言い聞かせる被爆者。原爆に遭っていることを理由に相手の親から結婚を反対され、独身のまま生涯を終えた被爆者もいました。

そして核兵器のない平和な世界を創るためには、たとえ自分の意見と反対の人がいてもまずは話をしてみることが大事であり、決してあきらめない「ネバーギブアップ」の精神を若い世代へ伝え続けた被爆者。こうした被爆者の体験に基づく貴重な平和への思いを伝えていくことが、ますます大切になっています。

しかしながら、米国とロシアが世界の核弾頭の約９割を保有し続け、またロシアによるウクライナ侵攻や混迷を極める中東情勢を背景に、世界中で軍備増強の動きが加速しています。各国の為政者の中では、こうした現状に強くとらわれ、「自国を守るためには、核兵器の保有もやむを得ない。」という考え方が強まりつつあります。こうした事態は、国際社会が過去の悲惨な歴史から得た教訓を無にすると同時に、これまで築き上げてきた平和構築のための枠組みを大きく揺るがすものです。

このような国家が中心となる世界情勢にあっても、私たち市民は決してあきらめることなく、真に平和な世界の実現に向けて、核兵器廃絶への思いを市民社会の総意にしていかなければなりません。そのために、次代を担う若い世代には、軍事費や安全保障、さらには核兵器のあり方は、自分たちの将来に非人道的な結末をもたらし得る課題であることを自覚していただきたい。その上で、市民社会の総意を形成するための活動を先導し、市民レベルの取組の輪を広げてほしいのです。その際心に留めておくべきことは、自分よりも他者の立場を重視する考え方を優先することが大切であり、そうすることで人類は多くの混乱や紛争を解決し、現在に至っているということです。こうしたことを踏まえれば、国家は自国のことのみに専念して他国を無視してはならないということです。

また、市民レベルの取組の輪を広げる際には、連帯が不可欠となることから、「平和文化」の振興にもつながる文化芸術活動やスポーツを通じた交流などを活性化していくことが重要になります。とりわけ若い世代が先導する「平和文化」の振興とは、決して難しいことではなく、例えば、平和をテーマとした絵の制作や音楽活動に参加する、あるいは被爆樹木の種や二世の苗木を育てるなど、自分たちが日々の生活の中でできることを見つけ、行動することです。広島市は、皆さんが「平和文化」に触れることのできる場を提供し続けます。そして、被爆者を始め先人の助け合いの精神を基に創り上げられた「平和文化」が国境を越えて広がっていけば、必ずや核抑止力に依存する為政者の政策転換を促すことになります。

世界中の為政者の皆さん。自国のことのみに専念する安全保障政策そのものが国と国との争いを生み出すものになってはいないでしょうか。核兵器を含む軍事力の強化を進める国こそ、核兵器に依存しないための建設的な議論をする責任があるのではないですか。世界中の為政者の皆さん。広島を訪れ、被爆の実相を自ら確かめてください。平和を願う「ヒロシマの心」を理解し、対話を通じた信頼関係に基づく安全保障体制の構築に向けた議論をすぐにでも開始すべきではないですか。

日本政府には、唯一の戦争被爆国として、また恒久平和を念願する国民の代表として、国際社会の分断解消に向け主導的な役割を果たしていただきたい。広島市は、世界最大の平和都市のネットワークへと発展し、更なる拡大を目指す平和首長会議の会長都市として、世界の8,500を超える加盟都市と連帯し、武力の対極にある「平和文化」を世界中に根付かせることで、為政者の政策転換を促していきます。核兵器禁止条約の締約国となることは、ノーベル平和賞を受賞した日本原水爆被害者団体協議会を含む被爆者の願いに応え、「ヒロシマの心」を体現することにほかなりません。また、核兵器禁止条約は、機能不全に陥りかねないＮＰＴ（核兵器不拡散条約）が国際的な核軍縮・不拡散体制の礎石として有効に機能するための後ろ盾になるはずです。是非とも来年開催される核兵器禁止条約の第１回再検討会議にオブザーバー参加していただきたい。また、核実験による放射線被害への地球規模での対応が課題となっている中、平均年齢が86歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩にしっかりと寄り添い、在外被爆者を含む被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆80周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、決意を新たに、人類の悲願である核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に、これからも力を尽くすことを誓います。

令和７年（2025年）８月６日

広島市長　松　井　一　實

平和への誓い

いつかはおとずれる、被爆者のいない世界。
同じ過ちを繰り返さないために、多くの人が事実を知る必要があります。

原子爆弾が投下されたあの日のことを、思い浮かべたことはありますか。
昭和20年（1945年）８月６日　午前８時15分。
この広島に人類初の原子爆弾が投下され、一瞬にして当たり前の日常が消えました。
誰なのか分からないくらい皮膚がただれた人々。
涙とともに止まらない、絶望の声。
一発の原子爆弾は、多くの命を奪い、人々の人生を変えたのです。

被爆から80年が経つ今、
本当は辛くて、思い出したくない記憶を伝えてくださる被爆者の方々から、
直接話を聞く機会は少なくなっています。
どんなに時が流れても、あの悲劇を風化させず、
記録として被爆者の声を次の世代へ語り継いでいく使命が、私たちにはあります。

世界では、今もどこかで戦争が起きています。
大切な人を失い、生きることに絶望している人々がたくさんいます。

その事実を自分のこととして考え、平和について関心をもつこと。
多様性を認め、相手のことを理解しようとすること。
一人一人が相手の考えに寄り添い、思いやりの心で話し合うことができれば、
傷つき、悲しい思いをする人がいなくなるはずです。
周りの人たちのために、ほんの少し行動することが、
いずれ世界の平和につながるのではないでしょうか。

One voice.
たとえ一つの声でも、学んだ事実に思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずです。
大人だけでなく、こどもである私たちも平和のために行動することができます。
あの日の出来事を、ヒロシマの歴史を、二度と繰り返さないために、
私たちが、被爆者の方々の思いを語り継ぎ、一人一人の声を紡ぎながら、平和を創り上げていきます。

令和７年（2025年）８月６日

こども代表
広島市立皆実小学校６年　関口千恵璃（せきぐちちえり）
広島市立祇園小学校６年　佐々木　駿（ささきしゅん）

Commitment to Peace

August 6, 2025

The day will come when there are no more *hibakusha* left in the world.
In order to avoid repeating the same mistakes, as many people as possible must know the truth of what happened.

Have you ever imagined what it was like on the day the atomic bomb was dropped?
At 8:15 am on August 6, 1945,
the very first atomic bomb in the history of human warfare was dropped on Hiroshima, annihilating in an instant the lives we take for granted.
Imagine: people burned beyond recognition,
unending tears pouring with wails of despair.
A single atomic bomb robbed countless people of their lives and changed the lives of survivors forever.

It has been 80 years since the atomic bombing.
We now have less chances than ever to hear directly from the *hibakusha*
as they speak of memories that are extremely painful; memories they would rather forget.
No matter how much time passes, we cannot allow this tragedy to fade from memory.
The responsibility to record and convey the voices of the *hibakusha* to the next generation falls to us.

Wars are happening right now in places around the world.
There are so many people who have lost loved ones and the will to live.

We should take these facts personally and concern ourselves with peace.
We should be accepting of diversity and work to understand others.
If each of us is considerate of each other's feelings and speaks to one another with compassion,
then there would be no more hurt or sadness.
We believe that the smallest of gestures to those around you
might one day lead to world peace.

One voice.
When spoken with conviction about the facts they learned, even just one voice can make a difference.
It isn't just adults, either. We, the children, also have the ability to take action for peace.
In order to avoid repeating what happened that day, to avoid repeating the history of Hiroshima,
we will build peace by continuing to convey the will of the *hibakusha* and weaving our voices together as one.

Children's representatives:
Sekiguchi Chieri (6th year, Hiroshima City Minami Elementary School)
Sasaki Shun (6th year, Hiroshima City Gion Elementary School)

令和７年８月９日
August 9, 2025

PEACE FROM NAGASAKI

被爆 80 周年
長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

The 80th Nagasaki Peace Ceremony

式　次　第		Program
被爆者合唱	１０：４０	Chorus by A-bomb Survivors
開　　式	１０：４５	Commencement
原爆死没者名奉安	１０：４６	Laying to rest of the list of victims who died during the past year
式　　辞	１０：４８	Opening Address
献　　水	１０：５２	Water offering
献　　花	１０：５４	Flower offering
黙　と　う	１１：０２	Silent prayer
長崎平和宣言	１１：０３	Nagasaki Peace Declaration
平和への誓い	１１：１２	Pledge for Peace
児 童 合 唱	１１：１９	Children's chorus
来 賓 挨 拶	１１：２４	Addresses
合唱　千羽鶴	１１：４０	Chorus "A Thousand Paper Cranes"
閉　　式	１１：４５	Closing words

目　　次

会場案内図…… 1 ページ
被爆者合唱…… 2
司会者名・献水の採水場所…… 2
原爆死没者名簿登載者数…… 2
式　　辞…… 3 ～ 4
長崎平和宣言…… 5 ～ 8
平和への誓い…… 9 ～10 ページ
児 童 合 唱…… 11
千 羽 鶴（ 歌 ）…… 12
長崎市民平和憲章…… 13 ～ 14
長崎平和宣言<ことばの解説>… 15 ～ 18
平和祈念式典会場周辺図…… 19

長　崎　市
City of Nagasaki

被爆80周年特設サイト

長 崎 平 和 宣 言

1945年８月９日、このまちに原子爆弾が投下されました。あの日から80年を迎える今、こんな世界になってしまうと、誰が想像したでしょうか。

「武力には武力を」の争いを今すぐやめてください。対立と分断の悪循環で、各地で紛争が激化しています。

このままでは、核戦争に突き進んでしまう―。そんな人類存亡の危機が、地球で暮らす私たち一人ひとりに、差し迫っているのです。

1982年、国連本部で被爆者として初めて演説した故・山口仙二さんは、当時の惨状をこう語っています。

「私の周りには目の玉が飛び出したり　木ギレやガラスがつきささった人、首が半分切れた赤ん坊を抱きしめ泣き狂っている若いお母さん　右にも　左にも　石ころのように死体がころがっていました。」

そして、演説の最後に、自らの傷をさらけ出しながら、世界に向けて力強く訴えました。

「私の顔や手をよく見てください。世界の人々　そしてこれから生まれてくる子供たちに私たち被爆者のような　核兵器による死と苦しみを　例え一人たりとも許してはならないのであります。」

「ノー・モア・ヒロシマ　ノー・モア・ナガサキ

ノー・モア・ウォー　　ノー・モア・ヒバクシャ」

この心の底からの叫びは、被爆者の思いの結晶そのものです。

証言の力で世界を動かしてきた、被爆者たちの揺るがぬ信念、そして、その行動が評価され、昨年、日本被団協がノーベル平和賞を受賞しました。日本被団協が結成されたのは、1956年。心と体に深い傷を負い、差別や困窮にもがき苦しむ中、「自らを救うとともに、私たちの体験をとおして人類の危機を救おう」という結成宣言をもって、長崎で立ち上がりました。

「人類は核兵器をなくすことができる」。強い希望を胸に、声を上げ続けた被爆者の姿に、多くの市民が共感し、やがて長崎に「地球市民」という言葉が根付きました。この言葉には、人種や国境などの垣根を越え、地球という大きな一つのまちの住民として、ともに平和な未来を築いていこうという思いが込められています。

この「地球市民」の視点こそ、分断された世界をつなぎ直す原動力となるのではないでしょうか。

地球市民である、世界中の皆さん。

たとえ一人ひとりの力は小さくとも、それが結集すれば、未来を切り拓く大きな力になります。被爆者は、行動でそう示してきました。

はじめの一歩は、相手を知ることです。対話や交流を重ね、互いに理解し、小さな信頼を重ねていく。これは、私たち市民社会の大きな役割です。

私たちには、世界共通の言語ともいえるスポーツや芸術を通じて、また、発達した通信手段を使って、地球規模で交流する機会が広がっています。

今、長崎で、世界約8,500都市から成る平和首長会議の総会を開いています。市民に最も身近な政府である自治体も絆を深め、連帯の輪を広げています。

地球市民として、共感と信頼を積み重ね、平和をつくる力に変えていきましょう。

地球市民の一員である、すべての国の指導者の皆さん。

今年は、「戦争の惨禍を繰り返さない」という決意のもと、国連が創設されてから80年の節目でもあります。今こそ、その礎である国連憲章の理念に立ち返り、多国間主義や法の支配を取り戻してください。

来年開催される核兵器不拡散条約（ＮＰＴ）再検討会議は、人類の命運を左右する正念場を迎えます。長崎を最後の被爆地とするためには、核兵器廃絶を実現する具体的な道筋を示すことが不可欠です。先延ばしは、もはや許されません。

唯一の戦争被爆国である日本政府に訴えます。

憲法の平和の理念と非核三原則を堅持し、一日も早く核兵器禁止条約へ署名・批准してください。そのためにも、北東アジア非核兵器地帯構想などを通じて、核抑止に頼らない安全保障政策への転換に向け、リーダーシップを発揮してください。

平均年齢が86歳を超えた被爆者に、残された時間は多くありません。被爆者の援護のさらなる充実と、未だ被爆者として認められていない被爆体験者の一刻も早い救済を強く要請します。

原子爆弾で亡くなられた方々とすべての戦争犠牲者に、心から哀悼の誠を捧げます。

被爆80年にあたり、長崎の使命として、世界中で受け継ぐべき人類共通の遺産である被爆の記憶を国内外に伝え続ける決意です。永遠に「長崎を最後の被爆地に」するために、地球市民の皆さんと手を携え、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くしていくことをここに宣言します。

2025年（令和７年）８月９日

長崎市長　**鈴　木　史　朗**

平 和 へ の 誓 い

1945年８月９日、私は爆心地から3.3㎞の県立長崎中学校の校舎内で被爆しました。13歳の時でした。

「敵大型２機、島原半島を西進中」という西部軍管区の放送を生徒が大声で職員室に向かって報告しているのを聞いてから、何分も経たないうちに敵機の爆音が聞こえてきたかと思うと、その音が急に大きくなりました。次の瞬間、身体がすごい光に包まれ、私は「学校のテニスコートに爆弾が落とされた」と思い、小学生の時から訓練されていたとおり、目と耳を塞いだ姿勢を取り、床に伏せました。

爆発の瞬間は、オレンジ色と黄色が混じったような光の海の中に一瞬全身が埋もれたような感覚でした。続いて、すさまじい爆風で窓ガラスが破壊され、私は部屋の隅に頭を抱えて転がり込みました。その上に級友が折り重なってきたため、その体重で息もできない有様でした。しかし私は級友たちの下敷きになったおかげで、無傷で済んだのです。級友たちはナイフのように尖った割れた窓ガラスが体に刺さり、血だらけになっていました。

さらに外を見渡すと、家々は壊れているのに火災は全く起きておらず、煙すら上がっていないのに、浦上地区には大きな火柱が上がっている。一発の爆弾だったはずなのに広範囲に被害が及んでいるのはどうしてかと、不思議に思いました。

その後、学校の防空壕に二時間ほど避難していたでしょうか。もう大丈夫だろうと、帰宅の途についた道は避難してくる人たちであふれかえっていました。

火傷か切り傷なのかわからない血まみれの男性。顔から血を流している赤ちゃんを抱いて歩く母親。腕が切れて垂れ下がっているのではないかと思われる人。こういう人々が中川町から蛍茶屋の方向に群れをなして歩いてくるのです。薄暗い雲が長崎の空一面を覆い、辺りは夏の真昼だというのに、あたかも日食のようでした。

こうして８月９日が過ぎ、戦争が終わりました。この爆弾が原子爆弾というものだと知らされたのは戦争終結後のことでしたが、原爆の恐怖はさらに続きました。それは原爆による後遺症です。爆心地付近にいたけれども、頑丈な塀で守られ、軽傷で済んだ人や、地下工場で仕事をしていて無傷で帰宅した人たちもいました。ところが、それらの幸運な人たちも、次第に歯茎から出血し、髪の毛が抜け落ちて次々に亡くなっていったのです。薬もなく、治療方法も分からず、戦争が終わったというのに原爆は目に見えない恐怖をもたらしたのです。

昨年、私が所属する「日本被団協」がノーベル平和賞を受賞しました。これは私たちの活動が世界平和の確立に寄与していることが評価されたということに他なりません。そして、この受賞を契機として、世界中の人々が私たちを見てくれていることに大きな意義を感じました。

平和に繋がるこの動きを絶対に止めてはいけない、さらに前進させよう、そして、仲間を増やしていくことが、私たちが目標とするところです。

絶対に核兵器を使ってはならない、使ったらすべてがおしまいです。

皆さん、この美しい地球を守りましょう。

2025年（令和７年）８月９日

被爆者代表　**西　岡　　洋**

※日本語訳は表紙裏面

Shinagawa Declaration of a Non-nuclear Peace Area

At the present time, on earth the human race has accumulated a nuclear arsenal quite sufficient to totally destroy itself.
No weapon has ever been developed which has not at sometime been put to use.
History bears witness to this terrifying truth.

We must lose no time in ridding the world of nuclear weapons.
Before the glaring flash fills the sky above our heads.
If we are too late, we will not even be left with a future to lament our failure.

With the heartfelt plea that nuclear weapons be abolished and permanent peace be established, Shinagawa City declares itself a Non-nuclear Peace Area and makes its appeal to the world.
We refuse to allow the manufacture, placement or introduction of nuclear weapons, by whatever country, for whatever reason.
To countries holding such weapons, we say, abandon your nu-clear armaments immediately!

For the future of this beautiful, irreplaceable earth and for all things living that exist upon it.

26th March 1985

Shinagawa City
Tokyo

２０２５　品川区平和使節　派遣レポート

発　行　令和８年3月
発行者　品川区区長室総務課
〒140-8715　東京都品川区広町２-１-36
電話　03-5742-6691
FAX　03-3774-6356
e-mail：somu-kokusai@city.shinagawa.tokyo.jp